豫言者曰

『神々の生活』は……先づ『自己禮拜』『自己祈禱』の生活樣式となるのである。

大生命は、常に自ら自身を禮拜し給ふのである、大生命は、常に自ら自身に祈禱し給ふのである。

『自己禮拜』とは、大生命が、その生活本體（人間）なる肉神を透して、自ら禮拜し給ふことである。

從來の旣成宗敎にては、人が神に向つて禮拜したものであるが、豫言者の新福音はそれの反對に……神が人に向つて禮拜し給ふのである。

大生命は、常に自ら自身を禮拜し給ふが故に、その禮拜は『二而一如の妙諦』として、大生命は自らこの肉神に向つて禮拜し給ふのである。

大生命の禮拜こそは、卽ち『二而一如の妙諦』として、それがそのまゝに肉神の自己禮拜となるのであるから、大生命の禮拜は、卽ち肉神の自己禮拜である。

自己禮拜は卽ち大生命の禮拜であるから……禮拜は、生活本體としての肉神の生活、卽ち『神々の生活』の內察反省となるのである……禮拜卽內察である。

『自己祈禱』とは、大生命が、その生活本體（人間）なる肉神を透して、自ら祈禱し給ふことである。

卽ち大生命が、自ら生活本體なるこの肉神に向つて祈禱し給ひ、神ながらの聖旨を發動し給ふのが自己祈禱である……『二而一如の妙諦』なるが故に、この大生命の祈禱がそのまゝに、肉神の自己祈禱となるのである。

大生命の祈禱は、卽ち自己祈禱であるから、『自己祈禱』のまに〳〵『神の生活』の啓展創造となるのである……祈禱卽創啓である。

神々の生活は、おのづから肉神相互の間にも、互ひに合掌して相禮拜せざれば已まざるものがある。

斯て肉神相互の禮拜は、取りも直さず……大生命が自ら禮拜し給ふ禮拜の境地……を體驗するものである。

更にまた肉神相互の禮拜は……生活本體を透して眼前に示現し給ふ大生命の禮拜……として、忽ち肉神相互の內察反省とならざるを得ないのだ。

また神々の生活は、おのづから肉神相互の間にも、互に相會して祈禱せざれば已まざるものがある。

斯て、肉神相互の祈禱は、取りも直さず……大生命が自ら祈禱し給ふ祈禱の境地……を體驗するものである。

更にまた肉神相互の祈禱は……生活本體を透して眼前に示現し給ふ大生命の祈禱……として忽ち肉神相互の生活に於ける啓展創造とならざるを得ないのだ。

斯の如く『自己禮拜』『自己祈禱』の生活様式となりて『神々の生活』を營むのであるが……絶對にして無限なる神の内察反省と、啓展創造とは、忽ちにして罪惡を自覺せざれば已まないのだ。

神の自覺は忽ち罪の自覺となり、神の生活は忽ち罪の生活とならざるを得ないのだ。

神の現はるゝところ、必ず罪が現はれるのだ、神のあるところ、必ず罪が伴ふものだ、罪の神に於けること、影の形に添ふ如しである。

『神の生活』は、必ず罪惡を犯さゞれば已まないのだ……何となれば禮拜卽内察であるからである、祈禱卽創啓であるからである、卽ち無限なる神の理想と、絶對なる神の完全とに照さるゝが故である。

されば『神の生活』は、卽ち神の啓展創造である限り、その内察反省は必ず罪惡であらねばならぬ罪惡は卽ち神の血となり、肉となる可き生活の必須條件であるからである。

罪惡がなければ『神の生活』を營むことは能きないのだ、罪惡がなければ『神の生活』その者が有り得ないのだ、極言すると、『神の生活』は、卽ち『罪の生活』であらねばならぬ……『罪惡卽神佛』とはそれである。

本來、罪惡は、卽ち神その者の過不及であるから、寸毫の過不及と雖も、罪惡の内察とならざるを得ないのだ。

罪惡の内察は卽ち神の創啓となり、神の創啓は更に罪惡の内察となり……自己禮拜、自己祈禱、禮拜と祈禱と相卽交互して、いよ〳〵内察反省を極め、啓展創造を極むるものである。

罪惡を知らない、罪に關係しない、たゞ神のみの生活とは、生活として有り得べからざることだ。

神のみの神とは、死んだ神と云ふことである、死んだ神とは、神ではないと云ふことだ。

また罪のみの罪と云ふことも有り得ないのだ……罪のみの罪とは、罪にはならないのだ、罪のみでは、生活と云ふ生活が有り得ないからである……神があればこそ罪もあり、罪があればこそ神もあるのだ、そこに生活と云ふ生活があるのだ。

神のないところには、罪もないのだ、罪のないところには、神もないのだ。

罪か神かの一方では、罪でもなければ神でもないのだ、一方ばかりでは何れも死んだものだ、生活とはならないのだ、生活と云ふ生活である限り、必ず神と罪とは相卽不離であらねばならぬ。

神が罪を生かし、罪が神を生かし、罪と神と互に相生きつ生かしつ、生活その者を啓展創造する『罪神一體』の生活こそ、卽ち『神々の生活』であらねばならぬ。

『罪神一體』の生活こそは、卽ち大生命が自ら生活し給ふ大生命の生活様式に外ならないのだ。

生活様式は、何處までも生活の様式である、生活の實在ではないのだ……生活の實在その者、生活その者の實在は、卽ち大生命あるのみだ。

凡ゆる罪は神々となり、凡ゆる罪惡が、大生命の中に溶けこんで同化して了ふのは、それが生命の道であるからである。

生命の道とは、卽ち大生命その者の如實の自性を云ふのである……『神の生活』とは取りも直さずこの生命の道を辿りて生きる生活を云ふのである。

S 問

豫言者の御教は、隨分理解するにも、實行するにも困難なやうに感じますが、モ少し入り易き道が具つて居りませんでせうか。

豫言者曰

この豫言者を信ずると信ぜざるとは、卽ち神と人との別るゝ處である。

苟も己が魂に醒めて居れば、兩眼は自ら太陽に向ふ如く、豫言者を信ぜざるを得ないのだ……豫言

者を信ずることは、それが神の自覺に位することである、何となれば豫言者の出現は、卽ち神生紀元の開闢であるからである。

先づこの豫言者を信ずることだ、信ずるとは疑はないことだ、疑はない心は同化である、豫言者との同化は神の自覺である……信仰卽自覺だ……これを『覺信一如の妙諦』と唱ふ。

『覺信一如の妙諦』こそは、卽ち『神生紀元』の鍵である、人々須らく先づこの鍵を捉ふることだ。

I 問

豫言者の新福音が從來の宗教と異なるところは、何んな點でありませうか。

豫言者曰

『人々まさに須らく神々の生活を營むべし』

新福音の齎らしたる絶對門の救濟は、罪惡のまゝに、罪人惡人のまゝに神であり、佛であることである。

人々をして神の自覺に位らしめ、『罪神一體』の妙諦に浴せしめて、神々の生活を遂げしむるもので

ある。

從來の宗教では、色々な修業や苦行をして煩惱罪惡を解脫してからでなければ、佛にもなれぬし、神にもなれないとしたものであつた。

また煩惱罪惡を解脫することの能きない凡夫は、如來の悲願や、天の父の慈愛に救はれて、往生成佛が遂げられ、天國に入ることを容るされるとしたものであつた。

今絕對門の救濟は、罪惡煩惱のまゝに神であり、佛であることを敎ゆるものである、罪惡深重、煩惱具足の人々をして、そのまゝながらに神を如實に、佛を如實に生きることを敎ゆるものである。

一たび神として神の自覺に位るや、煩惱も罪惡も忽ち意義を發揮して、罪は神と同位に座つて了ふのだ、『罪神一體』とはそれである、斯て凡ゆる罪惡は、『神々の生活』その者の血となり、肉となるのである。

一體、この煩惱罪惡を意識するのが、既に神であり、佛である確證であらねばならぬ、また煩惱罪惡を意識すると同時に、神や佛を意識する意識その者が、既に神であり、佛である確證であらねばならぬ。

神や佛の意識を離れては、煩惱罪惡の意識は有り得ないのだ、煩惱罪惡の意識は、神と佛との意識の裏面に過ぎない、神と佛とは生命の創造であり、煩惱罪惡は生命の內察である、生命とは、卽ち人

人の魂その者を云ふのである。

煩惱罪惡は、最高の生活を營むものにして始めて意識する最高意識である。

最高の生活とは卽ち自由の生活である、自由の生活は卽ち創造の生活である。

自由のあるところ、其處には必ず煩惱罪惡の意識があらねばならないのだ、神や佛と、煩惱罪惡との表裏一體、交互相卽した處に自由と創造の生活があるのだ。

煩惱罪惡の意識は、專らこの肉體あるが爲にのみ、要意された最高意識であることを知らねばならぬ。

肉體さへなければ煩惱罪惡は忽ち跡を絕つて了ふのだ、肉體はあつても自由意志さへなければ下等動物の如く、煩惱罪惡は、意識にも觀念にも上つて來ないのだ。

して見ると、自由と創造あるが爲にのみ生ずる煩惱罪惡の意義が、如何ばかり深遠幽妙であらうかを知らねばならないのだ。

また高貴なる生命を具有した魂が、煩惱罪惡を釀して止まざる肉體に敢て生活しやうとは……その生活の價値の如何ばかり深大であらうかを思ふことだ。

自由と創造との生活が、この肉體に於ける生活に限られざるを得ないのは、何たる意味深長の消息ではあるまいか。

肉に宿る魂の無限なる價値は、須らく當に神々の自覺に位る可き所以である。

これまで信じられて居た既成宗教の神にしても、佛にしても、若し人間のやうに肉體の中に宿らしめたとしたら、多少の煩惱罪惡を生ずるに相違ないのだ……

少くとも腹が立つこともあり、悲しいこともあり、風邪の爲に約束を遂げられなかつたり、進退に惑ふたり、戀に惱んだりするに相違ない……神も佛も、肉體に宿る以上、人間と同じ意味になつて了ふのだ。

たとひ神が天に居たり、佛が地に居たりして肉體に宿らず、肉體に宿らざるがため煩惱罪惡に罹らぬからとて、尊い者でも何でもないのだ、それでは價値がないのだ。

肉に宿つた神、肉に宿りながら煩惱罪惡を攝取しつゝ生活するこそ、無限の價値であり、權威であり、尊榮であらねばならぬ。

この肉に宿る『神々の生活』こそ、宇宙の一切祕義の果實である、この果實を結ばんが爲にのみ、天地人生は成立したものである。

一　問

神々の生活を營むにつきては、何か特別の方法でもありますでせうか。

豫言者曰

須らく先づ崇嚴の氣分を以て生活することである、崇嚴の氣分とは（平たく云へば神々しい氣分）ある、この氣分は何人の心にも奥深く閃くのであつて、神の閃きとしての大生命の光である。

崇嚴の氣分の燃ゆるところ、そこに『神の自覺』は輝くのである『神の自覺』の輝くところ、崇嚴の氣分はいよ〳〵燃ゆるのである……そこに『神々の生活』は自ら始まるのである。

神の自覺の工夫を、常燃念覺と唱ふるのである、自覺が念々連續して、いよ〳〵崇嚴の氣分は炎々と燃えあがる形である。

地球の上に住んで居るから、夜もあれば暗黑もあるが、地球の外に逸出して了ふと、夜もなければ暗黑もない、たゞ赫灼たる光明ばかりである。

常燃念覺は、地球の外に逸出して仰ぎ見る太陽の焰の如しである、燃えに燃ゆる自覺の熱火である。

一　問

神々の生活から見ましたならば、この世は何んなに映りますでせうか。

豫言者曰

今茲に上野公園（東京）に於ける大道說教の大意を示して見やう（門人の筆記から）。

諸君……こゝは神の國である、娑婆ではないのだ、こゝは如來の庭である、崇嚴を極めたる樂園である、天上界である、正に神々の住ふ可く要意された天地であるのだ。

諸君……諸君の足は、今紫雲の上を踏みつゝあるのだ、諸君の顏は、今、燦然たる光明に照されつつあるのだ。

釋迦も、この豫言者と神生紀元に遇ふことが能きなかつた、耶蘇基督も、この豫言者と神生紀元に遇ふことが能きなかつた、然るに諸君は、今、まの當り目親しくこの豫言者を見、耳親しくこの豫言者に聞きつゝあるではないか……何たる恩寵と因緣ではあるまいか、何たる祝福と法悅ではあるまいか。

豫言者は、何が爲に出現したであらうか、正に天地宇宙と人生の價値を定めんが爲に來たのである。

この櫻の花（櫻の下、石壇に立てる豫言者花を指しながら）を見ても、詩を作り、歌を詠み、繪に描いたり、物に彫つたり、興趣に醉はされるのは自然である。

更に心眼靈窓を開いてこの大天地を一瞥せよ……其處にころがつて居る小さな石ころ（脚下の小石を指しながら）も、脈々たる生命に躍るを見るのだ、ダイヤモンドよりも更に爛然たる光彩を見るではないか、嗚呼、そも何たる美妙の寂光土ではあるまいか、何たる莊嚴の天國淨土ではあるまいか。

我等は正に、この樂園に相應はしかる可き生活を啓かねばならないのだ……然り、心眼の開くところ其處に神があるのだ、靈窓の照すところ其處に佛があるのだ。

我等は、このまゝながらに神であるのだ、佛であるのだ、端的直下、各々自ら無上尊榮の神々である事を自覺するでなければならぬ。

今や人類は、人活的生活を脫却し、神として、『神々の生活』を啓く可き神生紀元が到來したのだ、神の自覺に位るものは卽ち神である。

天地成立以來、神の自覺と神の生活は、永遠より永遠に約束されたる歸趣であつたのだ。

孔子も、ソクラテースも、マホメツトも、モーゼも、クリシナも、オーヂンも、若くは基督、若くは釋迦、皆悉く神生紀元の就らんために、この豫言者出現のために先驅の任を盡したものであつた。

神生紀元の來らん爲に、宇宙は幾億萬年の向上を經過したものである、今や、猿族の時代を通過し

人間の時代を通過し去つて、漸くまさに神生紀元に到達したのだ、されば人類は正に飛躍、踴躍、跳躍、以て神生紀元を開拓すべく、各々先づ神の自覺に位らねばならぬ。

美術學校の生徒諸君（學生を瞥見しながら）諸君、果して何を畫かんとするか、自然か？　如何なる眼を以て自然を見るか？　まさに神々の住ふ可き自然は、須らく神々の眼を以つて見なければならないのだ、神生紀元となりては、自然を描く前に、先づこの豫言者を描くことだ……そこに神々の眼が開けるのだ。

豫言者一人の神の生活は、即ち人類進化の保證である、宇宙大生命の約束を履行するものである。

K　問

豫言者の御教にては、神と人との關係は、既成宗教にて說いたよりもはるかに、深遠微妙であるやうに拜察致されます、このところを平易に詳細にお示しを願ひます。

豫言者曰

神が、神として眞に生き給ふ生活は、その生活本體として人間を創造し給ひ、自ら人間の裏に生活

し給ふことを知らねばならぬ。

この人間を外にして、神や佛が自ら生活し給ふ生活體は無いのである。

たとへば親と云ふものは、子を產み育てる爲の親であつて、子を產み育てる事がなければ、親と云ふ存在はないのだ、親と云ふ存在がある限り、それは子を產み育てるものであらねばならぬ。

人間を以て生活本體として自ら生活し給はざる限り、神の存在はないのだ……人間もまた、神の生活本體として生活せざる限り、人生の意義はないのだ……それが即ち生命の本質であるからである、宇宙成立の歸趣であるからである。

つまり親を延長したのが子供である、親は子供の前身であり、子供は親の後身である……この分身されたる延長こそは、げに宇宙の祕義を盡されたる生活と云ふものである、生命の本質とはそれだ。

大生命、即ち神や佛は、人間と云ふ子供を分身して、その分身の裏に自ら生活し給ひ、その生活本體（神の化身、即ち人間）を成就し給ふのが、即ち自ら神を成就し給ふことである。

されば神を成就する爲に生れたのが人間である……人間が『神々の生活』を營むことは、即ち人間自ら神を成就することである。

人は神を成就し、神は人を成就し給ふのだ、この『二而一如の妙諦』に生きる神々の生活は、げに宇宙成立の歸趣目的である。

人間は、神の延長として、神が自ら生きるために化身し給ふた『神の生活本體』である、恰度、腦髓に於ける五官や神經系統と同じ意味であるが、それが五官や神經系統のやうな機械的ではないのだ

靈魂と云ふ極めて自由な自主的心力である、卽ち自我と云ふ化身の自覺的心力である。

腦髓が五官を透して働くやうに、神は人間を透して働き給ふのだ、五官は腦髓の延長なるが如く、人間は神の延長である。

子供は親の延長でありながら、而もそれが子供と云ふ特存である、親と同じやうに自覺的、自治的自主的の獨立體である、人間もまた神の延長でありながら、而も人間と云ふ特存である、獨立體である、獨立體としての神の生活本體である、何たる生活と云ふ生活の妙趣を極めたものであらうか。

斯の如く、神は自ら生活し給ふ生活本體として人間を創造し給ひ、自ら人の魂に『二而一如』の生活を營み給ふのである。

人々はまた神の自覺のまに〳〵、自ら神格を創啓するのである、その創啓が卽ち神が自ら生活し給ふことである……『神の生活』とはそれである。

D 問

罪惡の問題は、すべての宗教で重大な位置を持つてゐますが、豫言者の御教にては、人々は神であると御說きになりますのに、何うして罪惡の觀念や、意識が介在し得るのでありませうか。

豫言者曰

人間に罪惡の觀念があるのは、人間に神の觀念があるのと同じ觀念であつて、生活に於ける觀念の作用に外ならないのだ。

罪惡の觀念の最も銳敏に働くのは、神の最も明かなる故である、神の觀念を外にして罪惡の觀念のみ在り得やう筈はないのだ、されば罪惡の觀念は神の觀念と共に、極めて神聖であることを知らねばならぬ、これを『罪念神聖』と唱ふるのだ。

神は我以外に存在して、たゞ罪惡のみが我が裏に在ると考へるのは、正しからざる考へである、罪惡の觀念の在るところには、必ず神の觀念が在らねばならぬ、罪の在るところ必ず神が在らねばならぬ、神の在るところ必ず罪が在らねばならぬ、罪と神とは相卽不離であるのだ。

そこで罪が我が裏に在るならば、必ず神も我が裏に在る可きものだ……神と罪とは我が人格を創造しつゝ、我が裏に相卽一如の生活を營むのである、人格卽神格、神格卽人格である、これを『神人一格』と唱ふるのだ。

晝の明るいと云ふことは、夜の暗いと云ふことゝ表裏一體である……夜の暗いのが罪惡の觀念とすれば、晝の明るいのが神の觀念である……夜は寢むとともに、明日の活動と成功につき、考慮省察を遂げるための夜である、睡眠は活動の半部であり、考慮は成功の半部である。

もし、夜と云ふ月と星との世界がないとしたら、人生は索然たるものだ、詩人も居なからうし、哲學者も出なからうし、藝術家も宗教家もあり得ないのだ……人々は考へることすら能きなくなつて、智德の進歩が覺束ないのだ、從つて文化の發達もあり得ないのだ……それどころか、生物の成長と存續が覺束ないのだ。

夜の晝に於ける如く、晝の夜に於ける如く、罪惡の觀念と神の觀念とは、一つの生命の相卽的兩面である、もし、失敗や蹉跌が無かつたならば、罪惡を犯すことがなかつたならば、懺悔と改造がなかつたならば、禽獸の生活と同じことになつて了つて人生はあり得ないのだ。

夜間に於て、最も休養し省察を遂げた者が、晝間に於て最も能く働ける筈である、神をして神たらしめ、佛をして佛たらしめる省察の働きが罪惡の觀念である……罪惡の觀念のないところには、既に生活その者が在り得ないのだ、從つて神も佛も在り得ないのだ。

罪の觀念と神の觀念と相照らし、二而一如の作用を爲しつゝ生活するところに、內察と創造があるのだ。

要するに、神の觀念も罪の觀念も、神を無限に成就せんとする生命の生活樣式に外ならないのだ。

D 問

罪と神との關係は、夜と晝との關係でわかりましたが、そこをモ少し委しく伺へませんでせうか。

豫言者曰

人間は罪惡の所有者であると同時に、また神の所有者である、何となれば、罪惡に惱むのも人間であり神に憧れるのも人間であるからである。

人々は斯うして日々生きて居るが、この生きて居ると云ふことは、實は毎日死につゝあることだ、人生を五十年としても百年としても、その壽命が毎日減つて行くことである、卽ち死につゝあるのだ死につゝあることが、卽ち生きつゝあることだ、刻々に死ぬることがなければ、一刻と雖も生きることは能きないのだ。

子供の成長と云ふのも、實はだん〳〵死に近づきつゝあることである。

何うして死ぬることがなくして、生きることが能きないであらうか、死とは何ぞ？　生とは何ぞ？それをよく考へて見ることだ。

死と生は、決して別々なものではないのだ――生即死――死即生――そこに生死の一如があるのだ生命とは即ちそれである、生死を一如に生活するのが生命である。

そこで例へば、生を神と見、死を罪と見ることにすると、『罪神一體』の妙境が明らかに解るのだ、即ち神と罪とを一如的に生活するのが生命である。

死と云ふことは、生命が無くなつて了ふことではない――生命が更に生きることだ、その場合、死と云ふ形に現はれるまでのことだ、生命に死と云ふことはないのである。

夜になると、太陽がなくなるかと云ふにそうでない、夜が夜として暗くなるのは、翌日と云ふ明るい日を、更に新らしくするためである……死は恰度、夜のやうなものだ、太陽の世界よりも更に新らしい、更に明るい、光明世界に入る轉歩である……罪の觀念と、神の觀念との關係もそれと同じことだ。

如何なる罪人と雖も、それは神であらねばならぬ、神であるからこそ罪を犯すことも能きるのだ……生きて居るからこそ死ぬることがあるやうに、死ぬることがあるからこそ生きて居るやうに……

毎日死につゝあることが、即ち毎日生をつゝあることであるならば、毎日神であることは、それが

毎日罪であることであらねばならぬ、死と生とが一如であるやうに、神と罪とは一體であるからである。

神であるからこそ、罪を犯すのだ、罪を犯すからこそ神であるのだ、神は自ら罪となり、罪は自ら神となりて生活を成就するのである……死と生とが、一如となりて永生に歸して了ふ如く、神と罪とは、一體となりて生命に歸して了ふのである。

生即死、死即生である……神は即ち罪であり、罪は即ち神であるのだ『罪神一體』『罪惡即神佛』とはそれである。

罪を犯すことは神を賊ふではなくて、神を成就するのである、罪の犯さるゝところ、神はいよ〳〵新に創啓せらるゝのである……何となれば、罪惡の觀念は即ち内察反省であり、神の觀念は即ち啓展創造であるからである。

生死が一如として生命を新にするやうに、生命は罪と神とを一體として、自ら生命に生きるのである『二而一如の妙諦』とはそれだ。

D　問

豫言者の仰せらるゝ罪の觀念は、なか〳〵意義深いものであつて、私共了解に苦しみます、何うかモ少し委しくそこを御說き示し下さるやう願ひます。

豫言者曰

爲す可らざるを犯すのみが罪惡ではない、爲す可きを爲さぬのが罪惡である、惡を爲すばかりが罪惡ではない、善を爲さぬのが罪惡である、善を爲して充分に爲しきれないのが罪惡である。

嚴密に云へば、善事が理想的に行へないのが罪惡である……理想と云ふ理想が無限であるかぎり、罪惡の盡きやう筈はないのだ。

如何に極惡の罪人と雖も、その自責は……賢人が病氣のために違約をしたほどの自責にも當らない無關心なものがある、賢人の自責は、善事が理想的に行かないことだ。

卽ち罪の輕重は、その人々の自責の程度に比例するとしたら、惡人と賢人との罪の輕重は、俄に裁く可らざるものがある。

また强盜殺人の如きも、これを現代から見ると重罪犯であるが、溯つて野蠻時代の生活から見ると他の種族や部落と相戰ふ場合、掠奪や、殺戮は當時の道德として、生きねばならぬ生活の條件であつたのである。

その勇悍なる道德の遺傳が、偶々文化の現代に突發すると、恐るべき重罪犯として戰慄せしむるものがある。

斯の如きは恰度、現代に於ても、何うかすると、幾萬年以前に於ける猿族時代の間歇遺傳、突發して、往々臀部に尾骨を生じた畸形兒の產れるのと同じである。

强盜殺人の如き重罪犯人は、多くは一種の畸形兒であることを知らねばならぬ。

道德も、文化と共に進化するのであるから、文化の現代から見ると、野蠻時代の道德は多くは罪惡となつて了ふのである、文化に於ける凡ゆる罪惡は、野蠻時代に於ける凡ゆる道德であつたことを知らねばならぬ。

進化創造の人生である限り、何うしても罪惡を犯さないでは生きて居られない、生きて居る以上、罪惡を犯さゞるを得ないのだ。

殺人强盜は、勿論重罪であるが、善事を理想的に行へない賢人の自責も、その人の內察次第では、やはり重罪犯と同じことになるのである。

畸形的惡人の犯罪が、その遺傳と環境に基因するとすれば、善人が善事を爲すのも、その遺傳と環境に歸せねばならぬ……遺傳と環境から見ると、善人が善人たらざるを得ないやうに、惡人は惡人たらざるを得ないのだ。

悪人の内察は極めて鈍いが、善人の内察は極めて鋭いのだ、そこで罪悪の自責からすると、善人も悪人も同罪であらねばならぬ。

若し罪悪を犯すことを恐るゝならば、生きては居れない、死ぬるより外はないのだ。

それとも罪悪の無い世界に逃げて了ふか、罪悪のない世界は、即ち牛馬犬猫の世界である。

罪悪を犯せばこそ、神に生く可き道を知ることが能きるのだ、悪を犯すが故に、神に生きることが能きるのだ……罪悪を犯さない牛馬犬猫は、神とは交渉を絶したものだ。

罪悪を犯しつゝ神に生きることだ……その神に生きるところに、罪悪は自ら救ひつゝあるのだ……罪悪は自ら神を創りて生命に生きるのだ……『罪神一體』の妙諦とはそれである。

そうとしたら、何んなにでも罪悪を犯してよろしいではあるまいか？　など考へるではないのだ、悪の観念の自性は爲す可らず――である、善の観念の自性は――爲す可し――である。

爲す可らずを犯す時には忽ち――罪の自責――となるのである、そこに懺悔もあり悔改もあるのだ……その懺悔と悔改とが、即ち神々の創啓となるのである。

罪が人間に附者であるやうに、神もまた人間に附者であらねばならぬ、罪の方から見て、人間は罪人であるならば神の方から見て、人間は神であらねばならぬ。

この神と罪とを二而一如に生活するのが、即ち大生命が自ら生き給ふ生活本體（人間）の生活であ

る……**『神々の生活』とはそれである。**

斯の如くにして大生命は、人間を生活本體として自ら生き給ふのだ、其處にはたゞ生命の一體を見るのみである。

既成宗教は、人間が神に生きやうとする教へであつた、神の自覺に醒めるまでの準備としての教へであつたのだ、中には人に佛性ありなど教へたのもあるが、それも煩悩罪悪を解脱するでなければ成佛が能きないと、苦行工夫に捉はれたもので、罪悪の本質と意義とを知らなかつたものである。

我が福音はその反對に、神が人間に生き給ふ教へである……人が神になるではなくて、神が人になり給ふのだ、神が人になり給ふとは……大生命が自ら生き給ふ生活本體としての人間は、即ち神である……と云ふことだ。

この生活本體として、神々の生活を營むが故に、犯されたる罪悪は悉く神の過不及にすぎないものだ、早くいへば神の出來損ひである、その過不及や出來損ひの内察が、直に神々の創啓となるのである……即ち犯されたる罪悪を以て生活の食料となし、いよ〳〵神々の成就完成を遂ぐるものである。

罪悪を裏にしない神ばかりでは、神の意義を爲さない、神が死んで了ふのだ、神を表にしない罪悪ばかりでは、罪悪の意義を爲さない、罪悪が死んで了ふのだ。

時々刻々、死につゝあるのが即ち生きつゝあるやうに、罪悪を犯しつゝ神々の生活を營むのである

……罪を犯すのが神の生活である、神の生活は、必ず罪を犯すのだ、罪を犯さなければ神の生活は遂げられないのだ。

神の生活は卽ち罪の生活であり、罪の生活は卽ち神の生活である、『罪神一體』の生活こそ眞に『神の生活』であらねばならぬ。

『罪神一體』とは卽ち生死一如と同じ意味で、死が永遠の生である如く、罪は卽ち永遠の神であるのだ……永遠の生に對して死が無くなる如く、永遠の神に對して罪は無くなるのだ、それ故に『罪神一體』の生活を稱して、卽ち『神々の生活』と唱ふるのである。

神を自覺せざる限り、神は死んで居るのだ、罪を自覺せざる限り、罪は死んで居るのだ、一たび神を自覺するや、必ず神の啓展創造があらねばならぬ、一たび罪を自覺するや、必ず罪の悔改懺悔があらねばならぬ、悔改懺悔は卽ち神の啓展創造である……罪は卽ち神であるのだ。

畸形的な惡逆の罪人も、中には死刑の宣告をうけると、夜が明けたやうに痛快な發心をする者もあるのだ、信仰の光明に觸れ、驚く可き敬虔なる最後を遂げる者もあるのだ。

それが罪人であつたゞけ、信仰も熱烈に、悔改も眞劍である、共處に神があり佛があるのだ、生活本體として創られた人間は、始めから、神であり佛であるのだ、創られたとは……分身であり化身であると云ふことだ。

B　問

私共の常識では、神は人ではなく、人は神ではなく、人はたゞ神に祈り求めて、自己の救濟を得べきものと致してゐます。

然るに豫言者が、人々をして神の自覺に入らしめやうとなさるのは、われ〳〵の常識……否、既成宗教に對する大革命で、それに到達せられました道行には、承はる可きことが澤山あることゝ存じます、今その一端をお說き下さりますまいか……どうかお願ひ申します。

豫言者曰

人から神へ？　人から神へではなくて、神から人へであらねばならぬ。

これを譬へて云へば、王樣の子供が、幼い時から王宮を出て四方に流浪し、自分の身が、王の子供であることを知らないで居たやうなものだ、そこでその王の子供を探し出し、王宮に入れやうとしても、始めから王子であると云つたところで、反つて怖れて逃げ出すから、先づ宮殿の掃除など命じ、それから役向きを與へ、だん〳〵に王子であることを承知させることにした。

基督、釋迦、マホメツト、モーゼなどは、人々をして神の自覺に入れるまでの準備として、さまざまに骨を折つたものであつた、それが漸く機緣の熟するや、二十世紀の現代に於て、豫言者の出現と

神生紀元の開闢となり、始めて王子であつたことが宣明されたのだ、王宮深く迎へられたのである。

人々が神であること……神の生活を創めねばならぬ宇宙の約束を啓宣されたのである。

あのスエズにせよ、パナマにせよ、運河を開鑿するには、先づ大きな穴を處々方々に穿つたものである。

それをだん〳〵大きく掘つて、然る後潮流を利用して、穴と穴との障壁を水力によつて突破する、スエズなどは一世ナポレオンが着手したものだが、それから五十餘年を經て始めて開通されたのである。

斯くの如く釋迦、基督、その他多くの聖人哲人が現はれて大小幾多の穴を掘つたのだ、運河を開通すべく用意をしたのであつた、斯くて遺憾なく準備が出來た現代に於て、この豫言者は、東西兩洋の潮流を利導して、轟然、茲に運河を開通せしめたものである。

大小幾多の掘られた穴は、今や悉く潮勢に流されて餘す所がない、既に茲に豫言者が現はれた以上最早や宗教の分離を容さないのだ、佛教といふ穴も、基督教といふ穴も、マホメット教といふ穴も、悉く撤廢し去られて了つたのだ、今や僅に模型として歴史上の參考に止まるものである。

更にまた、大小無數の溪流が流れ〳〵て幾多の河川となり、それが利根川となり、隅田川となつて品川灣に注ぎ、遂に太平洋に宗朝するやうに、世界の凡ゆる宗教は皆悉く統一されて了つたのだ、豫

言者の（神生紀元の開闢）に流注したのである。

B　問

慾求は、われ〳〵人間に自然に發動して來るもので、押へつけても押へつけても頭をもたげてまゐります、さういふ以上は、それに何等かの意義がございませうと思はれます、しかしそれに任せて置けば何時も失敗を致します、これは慾求そのものが惡るいか、それを追ひ求むる方法が惡いか、孰ちらでございませう、御教を願ひます。

豫言者曰

慾求は無限を意味する……然し無限の中に、慾求は調和の豫想がなければならぬ、たゞ無暗と慾求して見たところで、調和の豫想が缺けて居たら、飛んでもない罪惡に陷ることを知らねばならぬ。

慾求は、須らく完全と調和の豫想がなければならぬ、そこで不完全及び不調和は、最も苦痛を感ずるところである。

たとへば君のやうに眼病をわづらつて居たら、太陽の光線がまぶしくて目を開けて居るさへ堪へら

れない、肉眼と太陽との調和が破れたからである、眼精とは、その調和を回復するための運動である、病理作用は健康回復、即ち完全と調和に返らんとする活動である、自然の勢力は一日も早く健康狀態に返さうとする、病者自身の願ひと同じである。

調和の破壞ほど苦しいものはないのだ、世に死ぬるほどの苦しみ、死にまさる悲しみがあるのはそれである。

調和を顧みずに、慾求を逞ふせんとしてもそれは無駄である、たとひ慾求を滿したところで、それはいよ〳〵調和を破壞するばかり、世に恐る可き罪惡を犯すのも是れがために外ならぬ、調和を得たる眞の慾求とは、必ず道德的であり宗敎的であらねばならぬ。

たとへば愛にしても、それが眞、善、美の調和を得たる愛でなければ尊い愛とはならないのだ、博愛、仁慈などは完全と調和を豫想した普遍的愛である、この普遍的愛を人々相互の間に行ふところに始めて人々各々の無限の慾求が滿足されるのである。

人の顏や形が十人十色で、各々違つて居るから、各自勝手に何うでもよろしいと考へたら、甚だしい心得違ひであらう。

人の顏や形がみんな同じやうに出來て居たら、何れが何の人やら、今見た人やら見ない人やら、曾てから知つて居た人やら、知らぬ人やら、誰が誰やらサツパリ分つたものではないのだ、そこでちや

んと十人十色になつて間違はないやうに出來て居る。

その十人十色、間違はないやうに出來て居るのは、各自が勝手氣儘に、利己的個人的の行動を取るためではないのだ、その反對に、完全調和の愛が遺憾なく相互の間に行はれるやうに、叮嚀親切に要意されたものである。

B 問

慾求は完全と調和とを豫想すべきものだ、むやみに慾求しても駄目だと仰せられました、これまで私共の失敗は、むやみに慾求した自然の結果であると存じます。

それで完全と調和とは耳には解りましたが、それを實行して見やうと思つても手がかりがなく、とりつきかねるやうに存じます、それがとりつけるやうに、解り易く御說明を願ひます。

豫言者曰

完全及び調和の表現をするには、パツとしたものでは表現されない、極めて纏まつたものでなければならぬ、つまり藝術的でなければ表現することが能きないのだ、十人十色はこれが爲である、自然界は、すべて藝術的の表現となつて居る。

無限の宇宙であるから、無限的の表現をしさうなものだが、その表現は有限となつて現はれる、有限となつて現はれるでなければ、現はれることが能きないのだ、無限が有限として現はれるのが、卽ち纏まつて現はれたものである、卽ち藝術的表現である。

その纏つて現はれた有限の中に、無限の消息を齎し來たるのが生命的である。

完全及び調和の無限なる生命が、卽ち神である。

無限の宇宙であるから、無限に大きいものが横つて居さうなものだが、反つて小さく現れて完全と調和を纏めて居るのだ。

この大天地の下に、小さな菫が咲いて居る、小さな蝶々が飛んで居る、さうしてそれが完全であり また調和であるのだ。

森羅萬象は、皆悉くこの美妙の諧調によつて表現されないものはないのだ、何んな大きなものでも皆この小さく纏つたものゝ集合體に外ならない、そこで纏まるといふことは、完全と調和を意味するものである。

何んな大きな繪を畫いても、それが纏つて居ない限り藝術品とはならぬ、小さくともそれが纏つて居たら立派な藝術品である、小さな一管の笛にも、音樂家は、無限の深さ高さを寓することが能きるのだ。

あの果實の核の如きは、最も纏まつた藝術品と云はねばならぬ、一つの核を地に播きさへすれば、それが生長して大きな樹木になつて、澤山の果實を結ぶ、一つの核の中に、完全と調和があつて、また無限の意義を藏するものである。

靈と肉との無限なる慾求を藏して、これを五尺の小軀に發現するのだ……これを生活と云ふ、無限の慾求を以てして、猶且つ有限の中に、而も極めて小さなる五尺の小軀に發現するのだ。

完全と云ひ調和と云ふても、それが表現の差等は、何處までも限りがないのだ……菫は菫、蝶々は蝶々の完全と調和であるが、魂の慾求は、まさに神の完全と調和の表現であらねばならぬ。

この無限なる慾求を五尺の小軀に表現するや、完全は忽ち不完全となり、調和は忽ち不調和となり甚しきは罪惡に陷らざるを得ないのだ……されど『罪惡を恐るる勿れ、たゞ神たらざるを恐るべし』慾求は無限であるから罪惡に陷ることにもなるが罪惡を恐れては神の表現が能きないのだ、生活の意義を沒して了ふのだ……表現は何處までも不完全であり不調和であるが、生活その者の意義は、絕對の完全であり調和であるのだ。

大生命が自ら生き給ふ生活本體としての五尺の小軀は、まさに神の自覺に位る肉神の我である……大生命は、大生命としての彼であるが……彼はまた五尺の小軀に宿る我である、彼は我であり我は彼である、この彼と我との二つが、一つの我として生きる肉神の生活こそは、絕對なる完全と調和の意

義であらねばならぬ。

A　問

豫言者の御教の自己禮拜、自己祈禱が最も難解に覺えますが、呑込めるやうに委しく御說明を願ひます。

豫言者曰

說明して貰ふと云ふよりも先づ自ら說明することである、自ら說明するとは、素直に自ら實行して見ることだ。

實行しさへすれば、忽ちわがものになつてそのまゝ體驗となるのである。

說明を聞いてゐると難解であるが、自ら身に行ふと忽ちその人のものとなるのである、例へば美味の說明を聞くよりも、直樣自分に食ふて見ると、その美味は忽ちその人のものとなつて了ふのと同じことである。

然し美味も、目前に供へなければ食ふことが出來ないから、その美味を今君の前に供へることにしやう。

從來の凡ゆる既成宗教では、人間が神や佛に對しての禮拜であり、祈禱であるが……

神の生活に於ては、それの反對に……神や佛が、人間に對して禮拜し祈禱し給ふのである、人が神佛に祈るではなくて、神佛が人に祈らせ給ふのである『自己禮拜』『自己祈禱』と云ふのはそれである。

大生命が自ら生活し給ふ生活本體（人間）に於ける生活樣式が、卽ち自己禮拜、自己祈禱となるのである。

『自己禮拜』は、大生命が生活本體（人間）を禮拜し給ふて、人々の魂をして神の自覺に位らしめ、崇嚴の氣分に滿たしめ給ふのである……その禮拜がそのまゝに、神の生活の內察反省を促し給ふ樣式となるのである。

神が人を禮拜し給ふが故に、人々はその禮し給ふ禮拜のまに〳〵、自ら禮拜せざるを得ない『二而一如の妙諦』として、自ら生活の內察反省を遂げざるを得ないのである。

『自己禮拜』とは、神と我との生活に於ける『二而一如の妙諦』を云ふのであつて、それが取も直さず神が自ら生活し給ふ生活本體（人間）に於ける神の生活樣式である。

『自己祈禱』とは、大生命がいよ〳〵啓展創造して、神の生活本體（人間）をして、いよ〳〵神の生

活を營ましめ給ふ創啓の樣式である。

自己禮拜及び自己祈禱を行ふには、須らく端座瞑目し、兩手を合掌して行ふべきである。

『自己禮拜』は、これを行ふに、始めのほどは頭がボーッとして、雜念忘想がしきりに起つて來るのであるが、その雜念を氣にしないやうにすることが大切である、雜念と云ふものは、腦力が働いてゐる以上さま〴〵に現はれて來る筈のものだ、それは當然起る可きものであることを爲と承知して置くことだ。

腦力は、寢て居る時は、寢て居るやうに睡眠的に働くものであるから、夢を見ることもある、何うしても雜念は起らざるを得ないのだ、起らざるを得ない雜念は何うにでも起るべしだ、雜念の起る中に纏めるのが、ほんとうに纏めることだ。

雜念のためにその氣分を奪はれたり、煩はされたりしながらも纏めることが能きるのだ。

禪宗などで云ふ無念無想と云ふことは、この雜念に捉はれないで、無念無想の氣持で居れと云ふたもので、實際に無念無想と云ふことはあり得ないのだ、熟睡した時こそ無念無想であるが、眠つて居ては無念無想も役に立たないのだ、眠らなければ無念無想はないのだ、醒めて居れば必ず雜念が起る雜念の中にありながら、雜念に煩はされつゝ纏める工夫が肝要である。

されば何うしたら、雜念の起るまゝに自己禮拜が能きるかと云ふに……初心の人は、口の中にて默語することである、聲を出さずに禮拜の言葉を默語することだ……さうすると、雜念の中にも、おのづから樂に纏まるものである。

神の自覺、崇嚴の氣分……內察、反省、懺悔、悔改、いづれもそれ〴〵に自己禮拜が遂げられるのだ。

大生命は（始中終）その生活本體（人間）なる人の魂を禮拜し給ふのであるから、その禮拜を迎へ奉り、その禮拜に應へ奉る……彼（大生命）と我との二而一如の生活樣式が、旣ち『自己禮拜』となるのである。

……神の自覺は如何？　崇嚴の氣分は如何？……魂の裏心、宮位、その境地、その風光……刹那刹那に於ける神の內察反省が、電光雷火の如くひらめくのである。

自己禮拜を行ふ每に、そこに崇嚴なる神々しい氣分にうたれ、神の內察が劍の如くに穿ち抉ぐるのである。

人々の心の奧には、何人と雖も時々、人間を超越したる氣分、情緖、情藻、願望、慾求などが必ず起るものである……この事實は、大生命が始中終、その生活本體なる人の魂を禮拜し、祈禱し給ふ如實の閃きであることを知らねばならぬ。

古來の聖哲は、皆この閃きを如實に體驗しやうと勵んだものである、殊に罪惡を自覺するところから、人間の超脱を願ふたのが凡ゆる宗敎の基調であつたのだ。

然るに人々は、この事實を空想のやうた夢のやうに弱つて了つて……自分達は人である、神ではないのだ、人間らしい人間味こそ本領であると、凡ゆる遺傳や、環境や、本能のまゝに生活を取扱つて了ふのである。

自己禮拜と自己祈禱とは、この大生命の閃きを、如實に生活に織りなすことである、卽ち大生命と我との二而一如の生活を營むのが、自己禮拜、自己祈禱である。

神の閃きに卽して如實の生活を開かざる限り、魂の向上はあり得ないのだ、これまでに、多少ともこの事實を實行して來たのであるから、幾分にても魂の向上が能きたものである……この事實の本源なる宇宙の秘義をあらはに示現し、如實の風光を宣明して餘さざるのが豫言者の敎へである。

豫言者の敎へとは……『人々各々は、大生命が自ら生活し給ふ生活本體である』ことを自覺して、自己禮拜、自己祈禱の生活樣式を營むことである。

されば夜寢む時には、最早やこれで死んで了ふものだと臨終の心持にて、安心立命の境地を體驗することである、朝起きたら、新らしく生れ更はつた神々しい氣分になつて、死と生とを味透した禮拜を遂げることである。

『自己祈禱』は、大生命が、その生活本體（人間）に對して……斯くあれ、斯くあらねばならぬ……と祈らせ給ふのであるから、人々は自ら生きるために、神が祈らせ給ふまに〳〵自ら祈ることである。

この自ら生きるために自ら祈ることが、それが卽ち神が自ら生き給ふ生活の樣式であるのだ「自己祈禱」とはこの神と我との生活が『二而一如の妙諦』として行はるゝを云ふのである。

要するに、自己禮拜の中にも自己祈禱があり、自己祈禱の中にも自己禮拜がある、禮拜は祈禱となり、祈禱は禮拜となり、祈禱と禮拜と交互相卽して、神と我との二而一如の妙諦を極めつゝ『神々の生活』を營むことである。

A　問

豫言者は神の自覺に位るべしとお說きになつてゐられますが、私共罪惡深重の凡夫身では、何うしてさういふことが出來ませうか、誠に勿體なくおそろしく存じます、何うしてさういふ御敎をお立てになつてゐられますか、伺ひたいと存じます。

豫言者曰

恐るゝ勿れ、疑ふ勿れ、その弱い汚れた罪惡の身であるからこそ、神の自覺に位らねばならないのだ。

神の自覺……卽ち我が魂は神であると自ら承知をすることだ、神を自覺すれば、一切の罪惡は忽ち神と同座して、『罪神一體』の妙諦に浴するのである、人々の心靈は本來神であるのだから、自ら神であると承知をするまでのことである。

煩惱罪惡の身なればこそ、神の自覺に位らねばならぬとは如何にも矛盾に聞え、自ら神であると承知をすれば罪惡が神と同座するとは、如何にもあつけなく聞えるかも知れないが……

宇宙大生命の啓示に係る新福音の妙諦は、卽ち玆に存したものである。

人類の有樣を譬へたら、こゝに一人の乞食がある、實は王者であつたのが、何かの事で子供の時から落ぶれて居た、そこでその由を乞食に告げ、直に王位に復るやう敎へられたのであつた、乞食は驚くまいことか恐れ慄いで、なかなかに身の王者たるを信じない。

やつとの事で夢の醒めたやうに信ずるには信じたが、見すぼらしい穢れた姿に、今更ながら我と我身に愛想をつかし……いかでこの身が宮殿に歸られやうぞ、沐浴して身を淸め、せめて錦繡の一枚も身に纏ふたら知らぬこと、見苦るしいこのざまで宮殿に歸つたら、刑罰の程が恐ろしい……と且つ悶

え且つ悲しみ……

王者に相應しい姿を整へ、然る後に宮殿に歸らんとて冠笏と錦繡を四方に求め、奔命に疲れ果て、あゝぎ〳〵打倒れて、飢寒愈々迫る愚かな乞食にも似て居るではあるまいか。

是に於て、豫言者は敎へて曰く、何を恐れ、何を疑ひ、何を憂ふるぞや、その儘直ぐに這入れ、穢れ腐つて居るだけ速に王宮に駈込むことだ。

冠笏と錦繡を王宮の外に求むるは無駄である、王宮に入りさへすれば晝夜絶ざる溫泉もあり、衣冠王笏は云ふまでもない、玉座は空しく汝を待つて居るではないか。

曰く、罪惡を恐るゝ勿れ、たゞ神たらざるを恐る可し。

曰く、罪惡を憂ふる勿れ、たゞ神たらざるを憂ふ可し。

されば、罪惡に囚はれて神の自覺を恐るゝこそ、罪惡の最も極まつたものである、是ほど大きな罪惡はないのだ。

今や、一切の宗敎を超越した新福音の神生紀元は到來したのだ……孔子も、ソクラテースも、マホメットも、モーゼも、釋迦も、基督も、この紀元の來らんために道を傳へたものである、豫言者出現のために先驅の任を盡したものである、この神生の就らんために、宇宙は幾億萬年の向上を經過したものである。

N 問

われ〳〵人間は、神と動物との中間に位するものとは信じますが、それが直に神であるとは何うしても考へられませぬ。

豫言者曰

多數の人が考へて居るやうに、神と動物との中間にあるのが人間であるとして考へて見ても、人間の肉體は動物と同じ者である、人間の肉體は、即ち動物である、肉體が動物であるやうに、人間の心靈は即ち神であらねばならぬ。

人類の肉體が直に動物であるやうに、人々の心靈は直に神である、肉體の方から見て、我が肉體は動物であると承知が出來るならば、心靈の方から見て、我が心靈は神であると承知が出來ねばならぬこれほどハツキリした確な數は、天地間に二つとないのだ。

馬か牛かなら知らぬこと、心靈の持主なる人間である以上、自ら神であると承知をせねばならぬ約束である。

肉體は、動物であるまいと思ふたところで、動物であるからには矢張り動物である、心靈は、神であるまいと考へたところで、神であるからには矢張り神である。

心靈とは、心の底を謂ふのである、心の底は直に無限の宇宙である、心の底には大生命（神）が滿へ給ふて居るのである、この心の底を直觀したのが、即ち神の自覺である。

A 問

しかし神の自覺といふことを、頭の中でわかつたと致しましても、われ〳〵罪惡深重のもの共では、これを實際の生活に現はして行くことは、とても出來ないことと存じますが、如何でございませう。

豫言者曰

實際の生活に現はして行けないと云ふのは、まだ神の自覺が出來て居ないからのことだ、眞に自覺が出來ると實際に現はせるとか、現はせないとか考へるものではないのだ……神である可き魂が神であることは、動物である可き肉體が、動物であるのと同じことだ、神の自覺に醒めたら、その生活はそのまゝ神の生活である。

今日でこそ、人間の肉體は牛馬と同じ動物であると云つても、何人にも異論はないが、昔はなかなかさうではなかつた、四つ足と人間の五體とは異ふのだ、以ての外なる異端であるとされたものであ

つた。

科學的にこれを研究すると、細胞の組織から、神經の系統から、官能の運動から、人間も四つ足も違つたことはない、殊に食物は全然同じ物を食ふて居るのである。

この動物的肉體に於て四つ足と人間は同じであるやうに、心靈としての神と、人間の魂とは同じである、その內容に於ても、その質に於ても同じである……たゞその量に於て違ふと云ふことが能きるのみだ。

萬物は一體であり、天地は一體であり、宇宙は一體であるのだ。

我が肉體は動物と一體であり、我が心靈は神と一體である、我が肉は動物であり、我が靈は神である、我は肉であり、また神である、これを肉神と唱ふるのだ。

神の自覺を以て肉體ながらに生活するのが、卽ち『神々の生活』である。

眞の人生は卽ち神生であらねばならぬ、肉體を透して神が生活し給ふ生き神の生活である。

神々の生活こそは、卽ち天地人生の歸趣である。

人間とは、卽ち大生命（神）が自ら生活し給ふ生活本體を云ふのである……この根本義に徹して、大生命と我と『二而一如』の生活を營むのが、卽ち神々の生活である。

神の自覺に於ける消息は……

永遠の大生命を呼吸するや、わが魂は赫灼として、おのづから神を自覺せざるを得ないのだ。

神を自覺するや、罪惡は、忽ち神に位して缺く可らざる神の資格となり、大生命は心龕深く臨宮し給ひ、絕高の威愛は火の如くに燃ゆ、聖絕崇絕、彼（大生命）と我との『二而一如の妙諦』に生きつつ『肉神』を色現し來り、榮光煥然、大生命の生活本體を體徹し、肉そのまゝに、陶然として神々の生活が創まるのである。

U 問

大問題の罪惡に就ては、これまで度々御懇篤なる御話を伺ひましたが、世間凡常の人々は危難災厄に就ても、大變苦しんでゐると存じます、この點を豫言者は何う御考へになつてゐますか。

豫言者曰

世の中に地震があつたり、洪水があつたり、また惡疫などが流行したり、危難災厄があると云ふことは、何う云ふ譯であるか？

若し神があるならば、殊にそれが愛と慈悲との神であるならば、世に危難災厄など有らう筈がない

人生に於ける苦みや、悲みと云ふやうなものは、始めから無かりさうなものだが……危難災厄は山の如く海の如くに、苦みや悲みが不可抗力の猛威を揮つて人生を惱ますのは、まさしく神が無い佛が無い證據である……と云ふ考へ方をするのが所謂無神論者である。

けれどもそれはその人の考へ方に過ぎないものだ、さう考へたからとて、神や佛が無くなる筈のものではないのだ、事實あるものは何處までも有る筈である。

神や佛があればこそ、さう云ふ無神論の考へも出るものだ、神や佛が全然無いものとしたら、下等動物の頭に善の觀念が無いので、從つて惡の觀念も有り得ないのと同じ譯で、有神論も無神論も起り得ないのだ。

無神論とは、自分に考察したゞけの神が見出せないところから、神が在るなら出して見せろとの訴訟である、無神論者は、神を外的客觀に求めて、見出しきれない愚なる理窟屋である。

苦みも悲みも知らない、病氣して醫者にかゝつたこともなければ、少しの心配事もないと云ふことを、有難い尊いことのやうに思ふのは、神を知らない——神の愛を知らない——神の生命を知らない——からの事だ、神の愛や生命を本當に知つて來れば、その反對に、苦みや悲みが何とも有難い尊いことになつて來るのである。

苦しくて、悲しくて腸が裂けるやうなことに出會はない、苦みも悲みも知らない世界……さういふ

世界を有難い尊い世界だと思ふならば、豫言者は何時でもさういふ世界に連れて行つてあげやうではないか。

苦みも悲みもない、少しの心配事もない結構な世界は、果して何處の世界であらうか？　それは動物の世界だ……犬猫の世界である、牛馬の世界である……未だ嘗て、豚が涙を流して悲んだと云ふことを聞かないではないか。

人間は泣く、苦しむ、悲しむ、いろ〳〵さま〴〵な身を裂くやうな心配をする……然しその半面には、それを償ふて餘りある喜びと樂みとがあるものだ、神を知らない者は、その喜びと樂みを眞に味ふことが能きない、眞の喜びを喜びきれず、眞の樂みを樂みきれないから、それが苦みと悲みに變じて了ふのだ。

神を知る者には、悲みも喜びとなり、苦みも樂みとなり——恩寵——と云ふ人生の最深味を味了することも能きるのだ。

この世界には、喜びと悲みと、樂みと苦みとがある……神を知ることは、悲みと苦みの中から、眞の喜びと樂みを捉へることである。

諺に可愛い子には旅をさせろと云ふことがある、旅をさすれば、時には寢ることも能きない、食ふことも能きない……死んだ方が增しだといふやうな辛い思ひをすることもあらう、さうした辛い思ひ

をさせるのが、子を可愛がることだと敎へたものである。

また可愛い子は鞭打つて育てろと云ふ諺もある、本當の愛と云ふものは、鞭打つて育てるやうなものであらねばならぬ……頭を撫でたり、譽めそやして育てるのみが愛と云ふものではない、眞の愛は見たところ、却つてその反對とも思えるものだ……この二つの諺は、古來の經典中の敎へにも優るほどの愛の哲學と云はねばならぬ。

何となれば愛は、價値を發揮せしむるでなければ眞の愛とはならぬからである、特に人格の價値を發揮せしむるところに、愛の意義があるからである。

またどんな痛ましい憂目に遭はうが、どのやうに苦しい悲しい境遇にあらうが、それに價値が伴ふてゐさへすれば、それは實に尊い生活であらねばならぬ。

献身と云ひ犧牲と云ふやうな者は、それの最も大きい者である……献身と云ひ犧牲と云ふのは神を信じ、人を愛し、神と人とのために身を捨てゝ死すとも悔ひざる熱烈の奉仕である、危難に遭へばいよ〳〵勇を發し、災厄に遭へばいよ〳〵光を放ちて天地を動かす至誠である。

眞の愛は多くは悲劇の中に發揮するものである。

それが神を知らない者には、戰慄すべき悲劇であるが、神を知る者には、莊嚴を極めた恩寵となるのである。

それで神を知らない者は、この悲劇を恐れ回避するのであるから、眞の恩寵に浴する機會に觸れることが能きない、神を知る者は、天に昇るが如き崇虔なる歡喜を以て、敢て身をこの悲劇に投ずるものである。

神を知らないで居れば、神を知らないだけで濟まされるかと云ふに、さうは行かないのだ……神を知らない者は必ず惡魔を知つて居るからである。

淺薄な樂みや喜びを追ふのは是が爲である、それが實は本當の災厄であることに氣が附かないのだ罪人や惡人は凡てこの種に屬したものである。

若し人生に、始めから危難災厄と云ふものがなかつたとしたら、文化の進むと云ふことは、絶對に有り得可からざることである、危難災厄のある處に文化はあるのだ……不幸災厄と思へることが、本當は神の愛であらねばならぬ。

要するに『人間の爲の神』であるか？『神の爲の人間』であるか？『神の爲の人間』であるから、また『人間の爲の神』であらねばならぬ……それが解りさへすれば、淺薄な安價な幸福を願ふやうな懐疑は起らない筈である。

U　問

今の御話の『人間の爲の神』『神の爲の人間』と申しますことが、まだ十分ハツキリ致しませぬから、特に御説明を願ひたう存じます。

豫言者曰

『人間の爲の神』としてのみ神を取扱ふと、或種の既成宗教の如く、神佛の功德として、專ら災厄除けの加持祈禱を營むにも至るものである。

須らく先づ『神の爲の人間』であると云ふことを信ずることだ……自分は神の爲に生き、神の爲に死ぬるのだ、一切は神に御任せ申したのだ……との大磐石の立命には、危難災厄も齒が立たないのである。

『人間の爲の神』であると云ふだけの信仰であるから、危難災厄を除けやうとするほど、いよ〳〵災厄は折重なつて逆襲するのであるが……『神の爲の人間』であると云ふ信仰に歸命すると、危難災厄は忽ち恩寵であり歡喜である……神様はいたづらであり皮肉である、基督を十字架につけ、ソクラテースに毒を呑ませ給ふのだ。

危難災厄とは、恩寵歡喜の鬼面であることを知らねばならぬ……自分を主として考へるから禍であ

るが、神を主として考へたら、そこに直に祝福があり法悦がある、ユダの皮肉は、それが十字架（救濟）の成就であつたのだ。

それで人間から見て幸福と思へることも、神から見れば禍であり、不幸であるのだ。

要するに、禍と云ひ不幸と云ひ、人生を呪はざるを得ないのは、神を知らざる人間の愚痴からである……禍か？　不幸か？　神を知らざるほどの大きな禍も不幸もないものだ。

眞に神を知ると云ふことは、わが裏に神を見出すことであらねばならぬ……『神の爲の人間』とは、わが裏に見出した神の爲に生活することである。

神の爲に生活するとは……神は、自ら生き給ふ生活本體（人間）として人間に宿り給ふが故に、人間は神が生活し給ふ生活本體（人間）であることを自覺することだ、この自覺の生活を『神々の生活』と唱ふるのである。

『神の爲の人間』であることが、卽ち『人間の爲の神』であらねばならぬことだ、この二而一如的生活の妙諦を萬民に宣するのが豫言者である。

T　問

古來の宗教では性慾を重大視して、いろ〳〵その取扱ひに苦心して居ますが、豫言者の新福音では、それを何んなに御解決になりますか。

豫言者曰

從來の宗教は、信仰上から專ら性慾の取扱ひに就き、さま〴〵とその方法を考究したものであつた宗教の誡律と云ふのも、禁慾と云ふのも、先づ第一に敎へられたのは、みな性慾の處置であつたのである。

佛敎に於ても基督敎に於ても、その他凡ゆる宗敎に於て、相應にこの方面は勵行されたものであつた、宗敎とは、性慾の處置を敎へるものだとさへ思はしめたものであつた。

婆羅門敎や佛敎などでは、極端までこの方面の禁慾を勵行し、性慾を以て罪惡視したものであつた

その反動として七百年前淨土眞宗なるものが起つた、一切衆生は煩惱具足として、性慾は已むに已まれぬ煩惱とし、罪惡深重の凡夫身なりと自ら佛性を棄て、欣求淨土、厭離穢土と、偏に彌陀の悲願にすがりて往生淨土を願ふたものであつた。

昔から誡禁を勵行したのは、本來佛性ありと、成佛を求めて止まざる心ではあるが、性慾を罪惡視する誤謬は、現實の身の煩惱を解脫するでなければ、成佛は能きないと、解脫の方法として誡禁を勵

行したものであつた。

誡禁に依つて性慾煩惱を解脫しやうと努力したのは、性慾の意義を知らない愚かなる無駄骨ではあつたが、佛性を重んずる心は、立派な宗敎上の價値である。

誡禁の勵行は、たとひ表面の形式にこそ守れたにせよ、心の中を叩いて見ると無駄であつた、從つて誡禁が裏切られた弊害も相應にあつたものである。

煩惱具足の凡夫を唱道する淨土眞宗が、性慾の不可抗力を認めたのは、一歩の進展ではあるが、これがために自ら棄てゝ凡夫と稱し、佛性を無視するに至つては一進一退であつたのだ。

一方は、佛性を認むるが故に、性慾の不可抗力を認めきれない、他方は、性慾の不可抗力を認むるが故に、佛性を認めきれない……佛性と性慾と相容れないので、身に佛性を認むるか、身に性慾を認むるかの解決が、淨土眞宗を興したのであつた。

つまりは孰れも、性慾を以て罪惡視したからのことである……その性慾を罪惡視するのは、佛性が眞に自分のものになつて居ないからのことである、本來佛性ありとは解つて居ても、その佛性が自覺となつて居ないからのことであつたのだ。

彌陀の悲願にすがつた往生の卽身成佛は、佛性の自覺ではないのだ、性慾を罪惡視した是心是佛は佛性の自覺ではないのだ。

佛性が自覺となつて居ないから、座禪止觀の工夫も、誡禁の勵行も無駄となつて、是心是佛は、彌陀の悲願に走らざるを得なかつたのだ、斯て悲願に救はれて卽身成佛となつたものである。

斯の如きは、相對門としての旣成宗敎が、まさに絕對門に進む可き已むを得ざる苦惱であらねばならぬ、萬死の苦惱は、眞理に近づく唯一つの道である。

本來佛性と云ふも、彌陀の悲願と云ふも、いづれも人の魂の叫びであつて、この矛盾は魂の矛盾ではないのだ……相對門に於ける一切の矛盾と誤謬は、頓て絕對門（豫言者の新らしき敎）に無碍統一さる可きものである。

動物は、本能のまゝにその生活を營むのであるから、萬事が容易で氣樂であるが、人間に於てはそれが極めて自由なるだけ、煩悶も苦惱も伴ふものである、容易ならぬ煩悶苦惱であるから、そこに宗敎が成立せざるを得ないのだ。

宗敎や信仰の矛盾、誤謬など、この自由の發動したる欲求の所產に外ならないのだ。

この魂の自由なる生活は、卽ちまさに、最も崇高にして深遠なる靈的慾求を託したものである。

肉體は、心靈を盛るための器であるやうに、性慾は、靈的慾求を實現するための機能である、靈的慾求は、性慾を透すでなければ發現することが能きないのだ。

三稜柱が光線を透すところに燦然たる七色を現ずるやうに、靈的慾求が性慾を透すところに、始めて科學があり、哲學があり、藝術があり、倫理があり、宗敎があり、凡ゆる人生の價値を發揮するのである。

靈的慾求の果實は、卽ち『神々の生活』であらねばならぬ。

豫言者宣べて曰く、『性慾は神聖なり』と、神聖なるが故に猥りに犯す可らずである。

性慾神聖の意識は、卽ち『神の自覺』の內容意識である……靈的慾求の果實たる『神々の生活』は神聖なる性慾を透しつゝ神格を創造するのである。神格卽人格、人格卽神格、神格とは『神人一格』を云ふのである。

世には、性慾を以て、食慾や睡眠と同じく、單なる本能と心得て居るやうであるが、食慾にしても睡眠にしても人間に於ては、單なる動物的本能ではないのだ。

自由なる生活は、食慾を取扱ふにも、それが科學的であり、藝術的であり、倫理的である、滋養の吟味、調理の鹽梅、家庭の團欒、隣人の懇睦、社會の經濟、平和の保證等、すべて靈的慾求に基かざるなしである。

性慾に至りては、肉體組織の一切である、肉體ありての性慾ではなくて、性慾ありての肉體である卽ち性慾のための肉體であるのだ、肉體とは、卽ち性慾その者の具體化を云ふのである、異性とはそれだ。

神の自覺が、この具體化したる性慾……肉體ながらの生活を營むのが、卽ち『肉神』である、肉ながらに神であり、神ながらに肉である、眼に見え耳に聞ゆる生き神である。

靈的慾求も、この性慾を透さなければ、その慾求を遂げることが能きない、靈的慾求とは、この性慾を透しての慾求を云ふのである、性慾を離れての靈的慾求はあり得ないのだ、極言すると、性慾の兩端が、卽ち肉と靈とであらねばならぬ。

詮するに、心靈は自ら肉體を組織して自ら宿るのだ……性慾は、靈性を仰ぎつゝ肉性に俯すのである、かくて靈卽肉、肉卽靈たらしめ、以て靈的慾求を發現して止まざるが神聖なる性慾である。

罪惡の觀念があるから、神聖の觀念があるのだ、神聖の觀念のあるところ、そこに神の觀念があるのだ。

從來の旣成宗敎にては、佛性と性慾とが兩立しない、神と罪とが兩立しないのであつた、故に、性慾は罪惡煩惱となり、佛性は姿を消して罪惡深重の凡夫身となり、神の子は、贖罪を願はねばならぬ罪人となつて了つたのである。

豫言者の絕對門は玆にあるのだ。

佛性と性慾とは兩立するのだ、神と罪とは、兩立すべきものだ、神と罪とは、相卽一如の生活である。

この神と罪との相卽一如は、卽ち一つの生命の生活樣式に外ならないのだ、これを『罪神一體』の妙諦と唱ふるのである。

罪の自覺は、卽ち神の自覺であらねばならぬ、罪は卽ち神であらねばならぬ、罪卽神、神卽罪、『罪惡卽神佛』とは、それである。

T　問

性慾の問題は大體わかりましたが、こゝに一寸思ひつきまして、御尋ねがそれますけれども、罪神一體と言ふならば、罪の生活と言ふても、神の生活と言ふても、どちらでも同じことのやうに考へられますが、何う云ふことになるものでせうか。

豫言者曰

毎日生きつゝあることは、毎日死につゝあることだ……されば生と云つても死と云つても同じであらうが、それを死と云はずに、生と云ふのは、生命は永遠であつて、生は、永遠の生であるからである、永遠の生に對しては、死は消滅であるからである。

罪の自覺は、卽ち神の自覺であらねばならぬ、卽ち罪は神であるとしたならば、罪人と云ふも、神の子と云ふも同じことになり、その生活を『神の生活』と云ふも『罪の生活』と云ふも同じことであらうと考へたら、それは大きな間違である。

生が、何處までも永遠の生である如く、神は何處までも永遠の生命である、死は一時の現象にて、つまりは消滅する如く、罪惡もまた消滅すべき性質のものである。

罪の自責と云ひ、自罰と云ふのは、つまりは罪の消滅を意味したものである、自責、自罰は、必ず新たなる生活を開くからである、悔改、懺悔とはそれである……罪の內察に對しては、必ず神の創造があるからである。

されば罪惡は、神を成就するための神の副作用であつて、神を離れて別に罪惡があるのではないのだ、それ故に、人々は神の子であり、佛であり、神であるのだ、その生活は、卽ち『神々の生活』であらねばならないのだ……

『神々の生活』こそは、卽ち人生の歸趣であり、天地組織の目的であつたのだ。

今や、豫言者の出現と共に、神生紀元の開闢となつたのである。

人々まさに神の自覺に位り、『人々須らく神々の生活を營む可し』である。

T 問

性慾は神聖なること、われ〳〵の生活は、神の生活であるべきことはわかりました。

それならば、自分と神との關係は、何う考へたらよろしいことになりませうか。

豫言者曰

藝術家は、その心を表現せんが爲にのみ生きて居ると云へるであらう、生きる目的は、藝術の創作にあるのだ。

宇宙大生命の目的とするところも、大生命それ自身を表現せんとする藝術の創作にあるのだ……人間こそは、極巧絕妙なる大生命の藝術品であらねばならぬ。

創作を試みた藝術に遺憾なく自己の表現が出來たならば、藝術家はもう死んでも悔いざる者があるのだ。

現にロンドンの博物館に陳列された或一個の石膏像には、眞に藝術家の面目を發揮した話がある。

その創作の當時、寒氣が强くて、寒さの爲に石膏像が裂けさうになつたので、自分の衣服をぬいで石膏像に被むせた、翌朝その彫刻家は、寒氣の爲に凍へて死んで了つたのである。

如來の慈悲とも神の愛とも云ふのは、この心を大きくしたものである、卽ち、創作されたる藝術品

としての人間に對する大生命の心である。

大生命は、人間を透して遺憾なく自ら發現し、生活せんことが創作の目的である……天地高有の成立も、人生の成立も、全くこの目的を遂ぐるために生じたものに外ならないのだ。

曰く、大生命は、自ら生活し給ふ生活本體として、人間を創作し給ふたのである。

曰く、大生命は自ら創作の中に生きんがために、生活本體として人間を創作し給ふたのである。

大生命の創作は……その創作されたる藝術品自身が、更に自ら創作せねばならぬやうに創作されたものである。

そこで、創作されたる藝術品としての人間は、大生命が自ら生活し給ふ生活本體として、自ら神を啓展創造するのである、故に人間は、藝術品であると同時に、藝術家であり、創作品であると同時に創作家であるのだ。

藝術品にして藝術家、創作品にして創作家たる人間は、果して何うしたら、心往くばかりの自己創作が能きるであらうか？

曰く、偏に『神々の生活』を營むことである……その生活樣式は、『自己禮拜』『自己祈禱』となるのである。

神々の生活とは、大生命と我と、二而一如の生活を云ふのである……彼（大生命）と我と、二にして一、彼から見れば、我は彼である、我から見れば、彼は我である、彼と我と二つでありながら、二つではないのだ、一つでありながら、一つではないのだ、二つが一つに生きる生活本體の生活を云ふのである。

神々の生活を營むところ、そこに人生の一切があり、一切の創作があるのだ。

創作の完成は無期限である……完成しつゝ無限に向ふものである、永遠の完成である、無限の成就である。

人間の死は、更に完成に移る關門である、更に取かゝる創作の轉歩である。

蠟燭が燃へつゝあるのは刻一刻に消へつゝあるのだ、燃へるのは消へるのである、生きつゝあるのは死しつゝあるのだ。

死したのは生れたのである、死は生の更に生である、新たなる世界に新たなる生活を創むるのである、生は創作である、死は創作の更に展開である。

『神の生活』には、死はないのだ、生ばかりである、死を踏越へて更に生きるからである、永遠の生命は、生き通しであるからである。

『神の生活』には、罪はないのだ、神ばかりである、神は罪を救ひ罪は神を救ひ、いよ〳〵神を創啓するからである、凡ゆる罪惡は、大生命に溶けこんで無くなつて了ふからである。

L 問

豫言者の新宗教は神々の生活として、現世に重きを置かれるやうに思はれますが、死後の生活、未來の世界に就ても、他に異なる御教があることゝ拜察致しますが、この點に就て、御體驗の一端を御洩し下さるやう御願ひ致します。

豫言者曰

靈魂の本質から言へば、現世とか未來とかの區別があるのではない、たゞ永遠の存在のみであるがしかし生死より見れば、其處にはじめて死後の生活の問題が起つて來るが、生死の皮相に捉はれないことだ。

死んでからは直に靈界であるから、この世の環境とは全く趣きが違ふのであるが、心靈としての靈魂は、そのまゝながらの靈魂である……靈界に於ける靈魂……何等の考察を容れない自明の儘であらねばならぬ。

自己の生命――卽ち本我は、嚴として宇宙に存在していよ〳〵進化啓展するものである……この世の有樣とは全く違つた環境に於て啓展するとも云へるのは、靈界は必ず人生以上の妙境であらうとの豫想が、何人も考へ得る自明の眞理であるからである……意識とか個性とかを考へない、たゞ我の存

在だけで澤山だ。

このわれ（我）の存在は、宇宙と我と『二而一如』の狀態に於て存在するのである、彼の佛敎などで云ふところの瓶に入れた海水を再び海に覆へせば、元の海水であると云つた虛無や無差別ではないのだ、宇宙と一體でありながらまた別である……この相卽一如の關係は、この世に於ける現在の體驗と同じことであらねばならぬ。

已むを得ず、その關係を言說に現はすならば、例へば頭腦の働きのやうなものである、我等の頭には、宗敎も、哲學も、藝術も、科學も、その他凡ゆる人事百般の事物が入つて居るが、それが少しも衝突しない、唯一つの能力の中に收つて居る、一つの能力に收まつては居るが、それが別々の能力であつて別々には働いて居る、別々の能力であるがそれがまた一つの能力である。

宇宙とは、宇宙大生命を云ふのである、大生命と我との二而一如の生活は、生死、現未を超越したるこの世ながらの如實の生活であらねばならぬ……しかし、靈界は、人生以上の妙境であらうとの豫想は、何人も考へ得る最も平易なる眞理であるが、而もそれが聖凡古今を問はざる直觀であるだけ、最も偉大なる靈智であらねばならぬ……靈界は、始めから公開された現在からの見透しであることを知らねばならぬ。……この現在から見透す力が卽ち靈智であるのだ。

例へば、感覺とか、意識とか、個性とか云ふやうなものは、鯛の臟腑見たやうなものだ、鯛が海に

泳いで居る間は、臓腑は餌に取つて無くてならぬ大切なもので、これが無ければ發育することも能きねば、生きて居ることも能きない、それほど大切なものでありながら一旦漁夫の手に渡つたら、臓腑最早や必要がない、既に食膳に上る時には臓腑を除いた肉のみとなり、人間の營養として精神生活には參加するのである。

丁度そのやうにこの世の中に居る間こそ、感覺だの、意識だの、個性だの、と個體を保護するに必要な機關であるが、靈界に入つては、靈界の靈的生活であるから、最早や無用のものとなつて了ふ、獨り靈魂、本我と云ふ生命ばかりが、大生命と二而一如の生活として靈界の妙境に飛躍するのである。

人生に於ける心靈の自覺から見ても、心靈は過去、現在、未來を超越した……その儘ながらの永遠の生活であるから未來や、死後の生活など考へる餘地もないものだ……未來や死後を考へる前に、先づ自己の心靈に直面することだ……己が心靈を見詰めることだ……そうすると未來も死後も無くなつて了つて、心靈は現在のまゝ永遠の光りを放つのみである、この現在のまゝなる永遠の光りが、未來の光りでもあり、死後の光りでもあるのだ。

L 問

靈智は、それを明かにするには、何うして明かにすることが能きるでせうか？

豫言者曰

靈智は求めて明かにすることも出來るが、しかしそれを求むる以前に、生れながらにして具はつてゐる靈智もある、それは……自我、靈魂不滅、神、永遠……といふやうなことである。

この生れながらの靈智を靈智として自覺するのが、最も大きな靈智である。

眞の靈智は生命を掴むことだ、神は生命の生命である、そこで生命を掴むとは、神を信ずるよりも、神に成るよりも、神で有ることであらねばならぬ、神の自覺に位ることが即ち眞に生命を掴んだことである。

要するに、眞の靈智は、自ら神を自覺して神の自覺に位ることだ……されば神の生活は、即ち生命の生命を掴んだ眞の靈智である、それが靈智の一切であることを知らねばならぬ。

禪宗などでいふ無と云ふのは、色々な意味に取りやうもあるが、無と云ふのは字で見ると無だけれど、實は有の極度と見、また活動の極度と見るのも活かした見方である。

物を廻轉さしても極度に至ると、靜止の狀態となつて廻轉して居ないやうに見えるものだ、太陽の

模型を廻轉すると、少し廻つて居る時は種々な色を呈するが急に速度を加へると、全く白色となり無色となつて了ふ、あの無色の無のやうなもので、言ふに言はれぬ極度の消息を云ふたものとすることも能きるのだ。

詮ずるところ、何物からも生命を見出し、何物をも生かすことが靈智である。

Y 問

私共は何んなに思ひ立たうと思つても出來ませんが、古來の宗教の歴史を見ると、基督の門人たちは皆二十五歳前後の青年であり、釋尊やマホメットの弟子たちも多くはさうであつたやうに思はれます、あんなに若くて傳道を始めたのは、既にそれだけの修業が出來て居たものでありませうか。

豫言者曰

金を儲けてから然る後慈善を施さうと云ふ考へは、生涯慈善を施す機會がない、悟りを開いてから修業を積んでから、始めて世の人を救濟しやうといふ考へは、一生遂に救濟的活動に觸れないで死んで了ふことである、生命の成長を知らないからのことだ。

世の人を救濟せねばならぬことが分つたら、假令自分はまだ悟つて居なくとも、救はれて居なくとも、世の人々を救濟しやうと云ふ大願を興さねばならぬ、この大願こそ卽ち生命である。

そうすると悟りも自ら開け修業も進む、貧民窟や無産の病者を救濟せんと願ふのは、必ずしも自分が富有であらねばならぬ筈はない、自分が貧乏ならば貧乏なるだけ、他人を救はんために大に奮鬪努力をすることである。

そうしたら事業もあがり、金も集つて實際の救濟が能きるやうになるものだ、然して自分自身の救濟も、その間にチヤンと行はれて居るのである。

眞に大願を興したならば、滿腔の歡喜と法悅は、語らざらんと欲するも語らざるを得ない、人と共に喜び人と共に樂み、儲勃禁ず可らざるものがある、生命は生命を生まざれば已まないのだ、傳道とはそれである。

E 問

眞に生きるといふことは、一寸考へると解つたやうで、よく考へるとバツトしてしまつて、一向

要領が得られません、それを現在に實踐的にハツキリと承ることが出來ましたら、私共日々の生活の上に確な覺悟が出來ると存じますが……

豫言者曰

眞に生きやうと思ふたら、眞理と共に生きるより生きやうはないのだ……行れば何んなことでも行れる、徹底的に行れる、行れる筈のものを行らないで居るのだから、生きながら死んでゐることになる、死と云ふのはそれである。

本當の死と云ふものは、生きて居ながら生活の意義を爲さない事だ、ただ己れ自身の爲にのみ生きて居ると云ふやうなことが即ち死である。

家族の爲に生きて居ると云ふことになると、それは生きて居る第一歩である、即ち他の爲に自分は生きて居る、家族の爲に自分は多大の犧牲を拂つて居る、非常の心勞もする、凡ゆる事を貢獻する、即ち生活の第一歩——生きて居るのである。

進んで一つの國家や社會の爲に生きて居ると云ふことになると、多少大きい生命となつて來る、更に世界の爲に生きて居るとなると、その自覺は餘程大きなものになる、或は全人類の爲にとなると、その自覺が最も生きたものである。

ただ自分の爲に生きて居ると云ふことは、自分と云ふものゝ見やうが大切なことになる、自分と云ふものを小さな個體にのみ限つて居て、この個體のみの自分だと云ふ觀念を離れない限り、生きて居ない、死である。

人生の爲の自分、世界に關聯したる自分、宇宙の一部である自分、或は宇宙と一體なる自分であると自覺して來た時に、その自分と云ふものが眞に生きて來る、然うなつて來ると、自分と云ふものが宇宙大に擴張して偉大なる意義を持つて來るのである。

それで自分一人であつても、これを宇宙的に自覺する時は、既にそれが宇宙的になつて來る、世界の爲に生きて居ると云ふことで行けば、世界的になつて來る。

それから社會の爲に、或は國家の爲に、或は全世界の爲にと云ふ考へになれば、結局この個體を超出するに到らなければ止まないのである、斯て生きる爲には何ういふ困難に遭うても、それが困難にならぬのみか、身を犧牲に供することの能きる無上の光榮にたゞ〳〵感泣するに至るものだ。

社會を愛し人類を愛する熱情に身を忘れ、死を見ること歸するが如しと云ふのが、本當に生きて居る生活である、是がないと眞に生きたものではないのだ。

E 問

しかしさう云ふ眞理を追ひ求むることは、なか〳〵容易なことではございません、それを追ひ求むる心得に就てお示しを願ひます。

豫言者曰

唯眞理を玩味する、唯眞理を攻究する、唯眞理を認めたいと云ふやうなことは少しも役に立たない、その眞理の爲に死すとも悔いずと云ふでなければ無駄である。

捨てる命が惜しいと云ふやうな氣がする眞理ならば、眞理とするに足らないのだ、たとひそれが眞理であつても、その人に取つては眞理でも何でもない者だ、苟も眞理を追ふたならば、眞理を求めたならば、全生活をそれに捧げるだけのことがなければならぬ。

信仰、主義の爲に國家社會と闘ひ、凡ゆる世界の不都合と闘ふことをしなければならぬ、卽ち眞理と死生を共にすることだ、其處まで行かねば眞に生きて居ると云ふものではないのだ。

石の橋を鐵棒で叩いて渡る——大變な要心をしたものだ、然う云ふことでは、本當の眞理に觸れることは能きないのだ、間違つたらそれ切りだと、不退轉の勇猛を以て掛らなければ眞理を見ることは能きないのだ。

眞理があつたら取りませう、眞理を見出したら信じませう……然う云ふ横着な者には眞理の方から用はないのだ、然う云ふずるい馬鹿用心には、眞理の方から逃げて了ふのだ、もう唯々この身命を投出して行くところに始めて眞理は來るのである。

F 問

眞理を追ひ求むる心得はわかりました、しかしその心得を以つて豫言者に當りましても、豫言者を豫言者として仰ぐ信念が湧いて參りませんのは、いかにも殘念でございますが……

豫言者曰

豫言者を認める覺悟としては——超越的氣分が特に大切である、超越的氣分とは言葉を以つて言ひ難いが……目前に人を見ない世間を聞かないやうな氣分、過去、現在、未來を忘却した氣分、眞理の外には何者も眼中にない氣分である、この氣分を以つて豫言者を見、この氣分を以つて福音を聞くことだ。

普通の氣分を以てしては、普通だけしか見えないものだ……豫言者の眞相を見ることは能きないの

だ。

例へばエツキス光線にかけて内臓を見ると、光線の力は皮膚と肉とを奪ひ去つて跡も留めない、豫言者を見るにも、その内面を見透さなければ分らない、俗見凡情に引つかゝつて居ては無駄である、超越的氣分と共に、狂熱的求道の精神が大切である。

釋迦や基督は、既に解剖された硝子壜中の内臓である、何人にも直ぐ分る、豫言者は今現に活きて居るのだ、活きた内臓を見透すにはエツキス光線でなければ見ることは能きないのだ。

一たびエツキス光線にかけたら解剖された内臓とは違ひ、脈々として活きて居るのだ！　潑溂として動いてゐるのだ！　生命その者である！　宇宙大生命を湛へたものである！

豫言者及び眞理と一體になる覺悟としては、この肉體を脱却した氣分を第一とする、肉體を脱却した氣分とは、身を捧げた絶對歸命である……肉體は眞理と豫言者を宿す聖殿となつたのだ、小さな自己は死んで了つたのである……奇蹟！　奇蹟として最も驚く可きは、その全生活が共處に一ぱいになつて漲つた無限の力である。

一　問

釋尊や基督の如き偉人は、既に過去の歴史に屬してゐて、あれほどの人物はとてもこの世に再現する如きことはあるまいと思はれますが、豫言者の思召は如何でありますか。

豫言者曰

是までの人生に於て最も人格的の生活をした人々は、既成宗教に於ける耶蘇、釋迦、孔子、ソクラテース、マホメツトと云ふやうな人々であつた。

是等の聖人哲人は、是までには優越した人格者であつたが、是から先き二十世紀以後の神生に於ては、是等の聖人哲人を平凡ならしむる無數の神格者の世界であらねばならぬ。

それが實現するでない限り、この世界は世界としての意義があり得ないのだ、この偉大なる世界は、極めて少數なる聖人や哲人が曾て生息したと云ふだけでは、何等意義を爲すものではないのだ。

この偉大なる世界は、始めのほどは下等動物ばかりが生息して居たものであるが、それがだん〳〵に進化して今日の人間が生息するやうになつたのである、その人間の中から、多少の聖人や哲人が產出したのであるが、蓋しそれらの聖人哲人は、是から先き、限りなく創化すべき神生の萠芽の一端に過ぎないものである。

この偉大なる世界は、實にまさに神々の生息すべき世界であらねばならぬ、神々の住ひとしてのみ始めてこの世界の價値が定まるのである、地上幾億萬の生靈は、悉く生き神……卽ち肉神として神の生活を營むに至つて、始めて天地成立の歸趣が成就されるものである。

この偉大なる世界をして、價値を定め、天地成立の歸趣をして成就せしめる力は、偏へに『我神の自覺』に存するのだ、その生活を稱して『神々の生活』と云ふのである。

一　問

然らば神々の生活は、何うして營むことが出來ますか。

われ〳〵の胸の中を叩いて見れば、自ら恥しいことばかりで、とてもさういふことは企て及ばぬやうに存ぜられます。

豫言者曰

假令、是までの心事及び行爲が、左ほど拔んでて居なくとも、山ほどの缺點があるにしても、また胸中に惡念を湛へるやうなことがあつても、神の生活を營むに少しも差支はないものだ、然う云ふも

のを取去らなければ、神の生活は營めないと云ふやうなものではないのだ。

如何に神の生活を營みつゝあつても、然う云ふ色々な邪念や、惡意が起ることもある可きものだ、惡念が起らないと云ふやうな事が、決して尊い生活と云ふものではないのだ、石で造つた石橋や、鐵で造つた鐵橋は、造られた當時からして一點の惡念も起さない、そのまゝ依然たる石橋鐵橋である、それが尊いと云ふ譯の者ではないのだ。

惡念は起るべきものだ、それに囚はれないことだ、神の生活を啓展創造する心得が大切である、其處に、神々の生活であらねばならぬ生活と云ふ生活の根本義があるのだ。

神々として何事も行へず、行らうと思ふ事もなか〳〵に行へないで居ても、行ひ能ふだけ、全靈をあげて神の生活に生きねばならぬと、神の自覺の立脚に居さへすれば……それがその儘に神の生活である、それより以上に神の生活と云ふものはないのだ。

斯う云ふて來ると……

それならば人としての行きかたと同じ行きかたであつて、神の生活として別段違ふところはないではないか？　と考へるであらうが……。

人としての行きかたと、神としての行きかたと形式は同じであるが、その內容は、卽ち人と神との相違である……神の自覺を以て、神々の生活を營むが故に神である。

動物の飲み且つ食らふのと、人が飲み且つ食らふのと、その原料まで殆ど同一であるが、人は何處までも人であると云ふ事實は、人は、人としての自覺があるからである……この人としての自覺こそ、卽ち人生を組織する如實の生命である。

人としての生活と、神としての生活と、その皮相の形式は殆ど同一であるが、その內容に至つては、實に人と、神との相違を知らねばならぬ。

孔子も偉い人であつた、釋迦も偉い人であつた、基督も偉い人であつた、ソクラテースも偉い人であつた、然し是等の人々も詰りは他の人と同じ心事であつたことを知らねばならぬ、胸底に惡い心が起らなかつたかと云ふに……釋迦も、基督も、さま〳〵と邪念が每日起つて居たものだ、更にまたその努力して居た事が、總て思ふやうに成し遂げられたかと云ふに、彼等の胸底を叩けば思ふことの百一も成らず、不滿足がちなものであつたのだ。

この不如意な心事は何人も同じことだ……彼等聖哲は、たゞ驀直にその理想に向つて戰ふ精神が强かつたまでのことだ。

斯うなければならぬ、斯うなさねばならぬ、何んな事があつても神や眞理に對し行らねばならぬと、不退轉の信仰を以て勇猛精進したのみである。

この勇猛精進することが能きたといふのは、自己の魂に光る神の閃きを迚つたからのことである。

普通の人は、この魂に光る神の閃きを迚らふとしない、殆ど氣もつかないやうな無關心でゐるから、人間を超越する氣分など思ひもよらないことである、それで不退轉の勇猛精進など有り得やう筈がないのだ。

然し翻つてこれを考ふると、この退轉の氣分も、罪惡を犯すほどの心も、たとひまた自分は罪惡の塊りであるにしても、それは自分一人で出かしたものではないのだ、みな祖先から與へられた——遺傳されたものが芽をふいて成長したものである。

今現に體質の弱い親には弱い子供が出來る、惡の親には惡の子供が出來る、總て人類の不道德不健全は、人類全體としての遺傳が九分九厘である、是等一切の負債を子孫はみな背負つて居るのだ。

行ひが思ふやうに行かなかつたり、體質が弱かつたりするのは、自分だけの責任ではなくて、祖先以來、全人類の責任であらねばならぬ。

この祖先以來全人類の責任であるにも係らず、個人々々に自ら罪惡の自責自罰に惱むとは、何たる崇絕の反省であらうか、是れまさしく魂にひそむ神性の照らすところである、人々の心靈は卽ちまさに神々であるからである。

この祖先以來、全人類の責任としての遺傳的罪惡は、それが全人類の責任であると云ふまでのことで、古往今來の全人類が責任を負ふて見たところで、それが何うにもならう筈はないのだ。

『神々の生活』に於ては、是等人類の遺傳は勿論、凡ゆる罪惡と云ふ罪惡は、大生命（神）が自ら負ひ給ふのである。

大生命が自ら凡ゆる罪惡を負ひ給ふと云ふ心は……一たび神の自覺に位るや、罪惡は忽ち神と同座に位し、神は罪を救ひ、罪は神を生かし、神と罪とが相卽して一如的生活を始むるからである。

これを『罪神一體』の生活と唱ふるのである。

要するに、人としての生活に於ては、罪惡の遺傳が占領するのであるから、罪惡は、罪惡のための罪惡となつて、罪惡の重荷はいよ〳〵嵩むばかりであるが、神としての神の生活に於ては、罪惡は卽ち神のための罪惡となるのである、卽ち罪惡は、神を成就する神の副作用であることを知らねばならぬ。

神の生活とは、罪惡を犯しつゝ神を成就する生活を云ふのである、罪惡を犯しつゝ生活するでなければ、神を成就することが能きないからである。

人としての罪惡は、まさに死にあたる重荷であるが、神としての罪惡は、それが神を成就する必須條件として、神の生活の半面であらねばならないのだ。

神の生活の半面は卽ち罪の生活である、神と罪と表裏相卽して魂を成就するのが、卽ち神々の生活である、これを『罪神一體』の妙諦と唱ふるのである。

一　問

だん〳〵お話を伺ひまして、このまゝ神々の生活が始められさうに思はれて參りました、さてい よ〳〵身を投出してやる氣分になるかと思ふと、忽ち引もどされるやうで、躊躇逡巡、こればかりは自ら何と仕樣もございません。

豫言者曰

神生紀元。

天地の成立と共に要意されたる『神々の生活』を創むることである。

神の生活は絶對の價値、凡ゆる無限の意義——宇宙に祕められたる一切の意味合を含められて居るのであるから、人々はまさに人生を超啓して、無上尊榮なる神々の生活を創むることである。

そこで現在の自分の有樣が、たとひ何うあらうとも差支はないのだ、力が足りると足りまいと問題にはならないのだ、それが能きると能きまいと問題にはならないのだ……たゞ神の自覺に位ることだ、神々の生活を創むることだ。

何となれば、アミーバアから無上尊榮の生活を超啓すべく……卽ち創造の世界として、世の始めから神の生活を約束されてあるからである。

そうして行つて行く中に、山も見えるし、河も見えるのだ、悟りも開け、體驗も積み……斯てずつと崇高な、美妙な、心靈深くひそむ內的神性が愈々發現して、如實の生活が開けることになるのである……須らく先づ人間の世界と人間意識を忘却し、放擲することだ。

されば世の神々よ！　現在、卽今、端的にこれを造りあげて行く外に、行爲と創造はないのだ。

世の導師となり先覺となり、この福音を以て世界人類に分ち與ふ可き大使命……何時と云はず卽今卽刻、この刹那の瞬間から神々の生活の同侶となることだ、豫言者の聲を聞いた以上、寸毫の猶豫も容されないのだ、言下に直下に起つことである。

D　問

基督などは今日では世界の大聖人と言はれてゐますが、何うして十字架にかゝるといふやうな悲慘な最期を遂げたのでありませうか、ソクラテースでも同樣でございます、あれほど偉大な人格だから、感化が覿面に及びさうであるのに、反對に罪人として刑せられたとは何故でありませうか。

豫言者曰

古への基督や、釋迦なりを今から考へる人の眼には、恰度黃金を見るやうなものであらう、誰にも黃金と云ふことは直ぐに解る、誰もこれを信ずるに異存はない。

然し山から出たばかりの礦石のまゝであると、素人には解らない、坑夫が打割つて來た礦石を見ると、そこらの石塊と殆ど異らない、却つて他の錫や銅などの礦石の方がピカピカ光つて綺麗である、それで素人は反つてこれを黃金の礦石ではあるまいかと考へる。

その礦石を碎いて臼でひいて、熱火にかけて精錬した揚句に、始めて素人は黃金であり、銅であり、錫であることを承知するのである。

今日から見た基督なり釋迦なりは、既に精錬された黃金であるが、生きて居た時の基督、釋迦は、礦石が山から轉がり出して來たのと同じであつた、だから路傍の石ころと同樣に棄てられて了つたのだ、基督は罪人として十字架上に屠られたのであつた。

礦石が轉がり出した釋迦や基督には、種々なる土石がクツついてガサ〳〵して、黃金だと信ずることはなか〳〵に困難であつた、そこで、今現に生きて居るこの豫言者を信ずることも困難となるのである。

今豫言者は、無限の意義を以て石ころの如く轉り出して居るのだ、これを信ずる眞實の信仰は、須

らく礎石のまゝ信ずることであらねばならぬ……この篤信が、創業宣傳の首礎であり柱石であるから
である。

D 問

この世界には、釋尊の教や基督の教や、その外澤山の教義が存在してゐまして、何れが優り、何れが劣るとも見極めがつきません。

全體これ等の宗教には、その根本に於て、相通ずるところの眞理といふものがありますでせうか、或は全く相容れぬ性質のものと見るべきでございませうか。

豫言者曰

數千年來幾多の宗教が起つた、佛教、基督教、マホメット教、儒教、猶太教、その他種々の教義がある。

是等幾つにも別れて居るから、從つて教へが違ひ、救ひの道が違ふて居るやうに思ふけれど、本當に詮議して來ると少しも違つたものではないのだ、佛教の救ひと、基督教の救ひと、マホメット教の

救ひと少しも違つて居ないのだ、只形式が違つて居るばかりである。

それが何ぜ變るかと云ふに、人類の宗教心はそれ〴〵に發達して、その地方〳〵に依つて宗教が生長した、佛教は印度に、耶蘇教は猶太に、孔子教は支那に、マホメット教はアラビヤに、それ〴〵その地方を救濟したのである。

家屋の建築でも、朝鮮に行けば朝鮮風の建て方があり、米國に行けば米國風の建て方がある、習慣風俗、民族の信仰と云ふものは、その地方〳〵に依つて自ら違つた形式を取るものである。

基督の言ふところと釋迦の言ふところと、猝に見ると大變に相違したやうであるが、西洋館と日本家屋は異ふけれど、窓のない家は一つもない、入口のない家は一つもない、窓がなければ住ふことが能きない、硝子と紙とは異ふけれど、窓には必ず用ひられて風を防ぎ明りを取るのである。

また四階、十階、十五階、二十階となつても、何れも眞直に立つて居る、横に寝て居る家は一つもない、高さにしては五階十階もあるが、一室としては世界萬國同じである、西洋の住いも日本の住いも、つまりは人々の住ふ家屋であつて、根本には異ひはないのだ。

斯やうに宗教も、一寸見ると大變異ふやうに思ふけれど、生命は一つであらねばならぬ、佛教の佛耶蘇教の神、いづれも同じ一つの神である。

例へば日本人、佛蘭西人、亞米利加人、皆同じ靈魂を有つて居る、凡ゆる國々に生れた宗教は、皆

同じ靈魂と神より來つたものである、神に背き、神でないところから出て來た者は一つもないのだ。

基督、是は偉大なる救主であつた、釋迦、是も偉大なる救主であつた、或は孔子にしてもマホメットにしても、總てそういふものであつた。

是等の救主に依つて建てられたる凡ゆる宗敎は、今や世界的に統一せらる可き時代となつたのである……この新たなる豫言者は、これが統一の任務を帶びたものである。

D 問

さうすれば世界的宗敎の統一といふことが豫言者の御仕事でありますか。

豫言者曰

凡ゆる宗敎が世界的に統一されたばかりでは、この豫言者の任務が盡くされたものではないのだ、統一されたる宗敎は、更に新たなる人生を創む可きものである。

新たなる人生とは、神生紀元の開闢を云ふのである、人生を閉ぢて神生を開き、『神々の生活』を創むることだ。

この神生紀元の開闢の爲に豫言者は出現したのである……豫言者の出現と、神生紀元の開闢……この一大事因緣に對しては、基督は、今この豫言者を禮拜しつゝあるのである、釋迦もこの豫言者を禮拜しつゝあるのである、基督來り釋迦來り、凡ゆる聖哲來つてこの豫言者の前に拜跪し、この敎の成就の爲に、身を震はして熱禱を捧げつゝあるではないか。

斯る宣言が、この豫言者の唇から叫ばれて居るのだ、一たびこの宣言を聽いた以上、何人も忽ち蹶起し、直にこの新たなる信仰を奉じ、この豫言者に歸命することだ。

今や神々の生活——人々各々、生ける神々として生活す可き神生紀元の開闢となつたのである——斯る人生を超啓したる肉ながらの神々の生活は、宇宙と人生との成立の約束であつたのだ。

豫言者の聲を聞かざれば即ち已む、一たびこれを耳にしたる以上、最早や逃げ去るを容されないのだ。

一たび太陽が昇つたら、如何なる物も照されざるを得ないのだ、太陽から逃げやうとは自滅である、照されて生きるより生きやうはないのだ。

須らく、照されたる恩緣の一大天寵に歸命することである。

H　問

古來の既成宗教には各々立派な經典が具つてゐまして、それを私共が讀みますと、何れも絶對の權威があるものゝ如く考へられ、取捨去就に迷はされます。

それで是を豫言者の御教の立場から御覽になりまして、比較して御批判になりましたならば何んなことになりませうか、それを伺ひましたら、私共がお教に對する理解も、よほど明かになつて參るかと存じます。

豫言者曰

儒教は、常識な倫理的だけに、深刻味に乏しいものがある。

例へば富貴は天に在り、富貴を見ること浮雲の如しなどともあるが、釋迦の行動に較べると、あつけない呑氣なことになつて了ふ、若し釋迦にして、富貴は天に在りなど考へて居たら、王宮を棄てゝ出家することも能きないことになるのだ、生、老、病、死に惱む釋迦は、富貴や貧賤など浮世のことを考へて居られなかつたのである。

富貴は天に在りにしても……富貴は、天から與へられたものであるから、少しの私心も挾んではならない、天意を體して悉くこれを世の爲に獻出すべきものだと心得たら、富貴は天に在りが活き上つ

て來るのである。

八萬四千の法門も、ウパニシヤツドの哲學も、これを詮じて來ると、卽身成佛、是心是佛、娑婆卽寂光土、煩惱卽菩提、生死卽涅槃の五つ位に約されて了ふのだ。

法華經も一言に縮めると、久遠本佛の一句になつて了ふ。

新舊約のバイブルも、これを詮すると、天の父の完きが如く完かれ、父と我とは一つなりに歸して了ふ。

回教のコーランも、劍の影に樂園あり、神の絶對服從になつて了ふのだ。

是心是佛も、卽身成佛も、久遠本佛も、父と我とは一つなりも、人間心靈の慾求を道破したものでまさに萬人の生活に實現されねばならぬ、神生紀元の準備として要意されたものであつた。

恰度、空中飛行機の考へは、希臘時代から、まだずつと以前から考へられたものであつたが、多くは空想として取扱はれ、甚しきは、天の使を見たやうに、人間に羽翼が生ぜざる限り、無駄な試みであると云はれたのであつた。

それが時節が來て見ると、二十世紀の現代となりて飛行機の曙光を實現することになつた。

吾々は人間だもの、神ではないのだ……と云ふのは、人間に羽翼の生ぜざる限り、空中の飛行は無駄であると云ふのと同じことだ。

佛教の卽身成佛も、基督教の神の子も、空しく經典上の品句として葬られて居たが、二十世紀の今日に於て、宇宙の祕義は忽ち破れ、恰も栗の實の殼を破りて地に墜つる如く、豫言者の出現となつたのだ、神生紀元の開闢となつたのである。

是に於て、始めて卽身成佛も事實となり、神の子も事實となつて、萬民悉く『神々の生活』を開く可き神生紀元が成就されたのである。

されば神生紀元となりては、いづれの經典も、適宜に活かして行きさへすれば何うにでも活きて來るのだ、棄つる方から云つたら、八萬四千の法門も、バイブルも、ウパニシヤツドも悉く棄て去つても差支へないが、活かす方から云へば、天理教の教典すら相應に活きて來るのである。

眞に神の生活を營む者には、取捨活殺自在であつて、而も世の中に棄つべきものは一つもないのだ。

神の生活を營む者は、天地宇宙、自然人生を以て直に經典とするのだ……この豫言者と、各自の魂を以て活ける經典とするのだ、そは無盡藏であるからである。

現代世界に於て、新宗教が處々に起つて居る、セオソフヰーと云ふのがあり、オープンコートと云ふのがあり、クリスチヤンサイアンスと云ふのがあり、色々やつて居るが、いづれも理智を主として宗教哲學の研鑽に止まるやうである。

その他モルモン宗だの、スエーデンボルグだの、バハイ教だのあるが、モルモン宗は、基督教の一

派であつて至極卑近なるものであり、バハイは、マホメット教から出たもので、救世軍が基督教から出て社會運動をやつて居るやうに、しかし救世軍よりもずつと廣範な社會運動と云はねばならぬ。

スエーデンボルグと云ふのは、天國や地獄を見て來たと云つたやうな行き方で、世の一部には、珍らしがられて居るやうである。

W 問

豫言者は、何時も諸宗教の統一を標榜してお出になりますが、然らば豫言者と、これ等諸宗教の開祖との關係は如何になりますか。

豫言者曰

二千年前、十字架について斃れた基督は、今この豫言者を禮讃して居るではないか……十字架は正に神の生活の先驅であつたのである！……

父と我とは一つなりの我は、卽ちまさに萬人の自我であらねばならぬ、斯て始めて天の父の完きが如く完かれの生活が能きるのである、要するに『神々の生活』は、世界一切の宗教の歸趣であらねば

ならぬ……

既に豫言者の出現を見た以上、猛火の燎く如く洪水の決する如く、萬人の魂は醒めねばならぬ……

神生紀元の到來を祝福し奉る……

王宮を棄てゝ成道した釋迦も、今斯う云うて居るではないか。

三千年前に佛敎を宣べたが、それは皆神生紀元の足場であつたのだ、今や豫言者の出現と共に、神生紀元の一大事因緣となつたのである、無上頂禮の法悅を以て合掌し奉る……

と釋迦は此處に立つて居るではないか。

右には基督、左には釋迦、マホメツト、モーゼ、孔子、ソクラテース、凡ゆる聖哲が豫言者の周圍に屹立して居るではないか、或は手をあげ或は聲を發し、豫言者の宣傳を禮讃しつゝあるではないか。

そは客觀に見たる諸聖哲禮讃の光景であるが、更に、諸聖哲はみな一になつて、始中終豫言者の裏に活きつゝあるのである。

『人々須らく神々の自覺を以て、神々の生活を營む可し』である。

更に各々、狂ふが如く神々の生活を宣傳す可しである。

闘をつくつて神の生活を絶叫せよ、獅子の如くに咆哮せよ……山動き海鳴り、天地ために震撼しつつあるではないか。

K 問

普通の意味でいふ、善惡についての豫言者の御考は如何でありますか、新宗敎の立場から御說明下さるやうに願ひます。

豫言者曰

善、惡と二つに、ちやんと始めから別々に分れて居るものではない、比較對照の言葉であつて、白とか、黑とか、美しいとか、醜いとか、明るいとか、暗いとか云ふのと同じことである。

白、黑、美、醜、明、暗、といふやうなものは、自然界の現象に於ける比較對照であるが、善と惡とは、獨り人生の價値批判に於ける比較對照の言葉である。

特に善惡は、意志及び行爲の上の比較對照であつて、善惡の如何は、人間生活その者の價値を批判するのであるから、善惡に對しては、意志の最高權威が伴ふものである、卽ち……善は爲す可し、惡は爲す可からず……と云ふことである。

帝展に入選しなかつたからとて、その畫工を牢獄に投ずる譯には行かぬ……惡を行ふたら直に牢に入れる、善惡の上には、如何に意志の最高權威が現はるゝかゞ解るであらう。

善、惡、始めからちやんと二つに別れては居ないが、意志行爲が、機宜に適したか適しなかつたか

が、善惡の別るるところとなる、機宜に適中するのが卽ち善であり、その過不及が卽ち惡である、例へて言へば、健康に適するやうに食事を攝つたり衛生を守つて居たら、それが善の意味である、食ひ過ぎたり、飲み過ぎたり不養生をしたら、それが惡の意味となる。

善惡の著るしい兩端を見るから、善と惡と、二つに別れたやうに見えるけれど、善の中にも惡があり、惡の中にも善があるのだ。

詮じつめると、善と惡とちやんと實在して居ると云ふものではない、眞に實在するものは心ばかりである、卽ち善と惡との觀念ばかりである、この觀念を意志行爲の上に發現して始めて善となり、惡となる、その發現の機宜を律するのが卽ち善惡の觀念である。

藥も用ひ過ぎては反てそれが毒となる、毒もその度を得れば忽ち藥となる、その匕加減は專ら名醫の手中にあるのだ、匕加減と云ふのは、卽ち意志行爲を律する善惡の觀念である。

人の心の本質は何んな者かといふと、それはやはり善である、この本質的から云ふと、天地宇宙も一切善であらねばならぬ、譬へば明るいと暗いにしても、全然暗いと云ふものは無いものだ、如何に夜が暗いと云つても、犬猫の目には晝と夜との差別はない、また夜しか見えない梟すら居るではないか、エツキス光線の如きは物體までも照破するのである。

天地間には全然暗黑といふ者はないのだ、暗いと云ふものは、明るいといふものを一層美妙にする

爲にのみ存在して居るのだ。

目をあげて天地を見ると、凡ゆる色彩が燦然として輝くのは、明るいと、暗いとが陰影を織りなすからである、この暗いといふものを取去つて了つたら、萬物皆光るばかりで、ぎら〳〵して見ることも出來なくなつて了ふ、恰度明暗その度を得るところに、燦然たる光彩があるのだ。

この暗いといふものが、明るいといふものに對するやうに、惡の觀念は善の觀念に對して、いよいよ善をして善たらしむる反省機能として、必要缺ぐ可らざる相對關係である。

暗いが明るいに對し、陰影の作用をなして光彩を放つやうに、最も鋭敏なる惡の觀念は、善の觀念に對して相對必須を云ふのである、惡の觀念は善の觀念を照らし、善の觀念は惡の觀念を照らし、互に相照破するところに、始めて意志行爲の上に最善を發現することが能きるのである。

君子、賢人、聖人、神人と云はれた人は皆、惡の觀念の鋭敏な人々であつた、それが鋭敏なれば鋭敏なるほど、人格はいよ〳〵高いものとなる、惡の觀念が鋭敏だから、善はいよ〳〵光を放つて立派な行爲が發現するのである。

惡を感じないでは善は決して成立するものではないのだ、惡を感ぜない善があるとしたら、それは既に善の意義を失したものであらねばならぬ。

惡人とは、惡の觀念が鋭敏でありさうに思はれやうけれど、惡の觀念の鈍いものが惡人である、惡

の觀念が鋭敏であつたら、惡事を爲せるものではないからである。

いよ〳〵高い處に登れば登るほど、いよ〳〵低い處が見えるのである、これ善人が惡の觀念のいよいよ鋭敏にして强烈となる所以である、惡人は低い處に這ひまはつて居るから、低い處も解らねば高い處も解らないのだ、これ惡人が善惡の觀念いづれも共に、鈍く且つ弱い所以である。

善と惡との觀念は、何處まで行つても盡くるものではないのだ。

善の觀念の無くならない限りは、惡の觀念は伴ふものである、善の觀念が强くなるほど、惡の觀念も强くなり、惡の觀念が强くなるほど、善の觀念も强くなるのが善人である、善の觀念が弱くなるほど、惡の觀念も弱くなり、惡の觀念が弱くなるほど、善の觀念も弱くなるのが惡人である。

單に觀念としては、斯の如く善と惡とは密接であるが、意志、行爲に發現する場合には、徹頭徹尾、善であらねばならぬ、何となれば、爲す可らずを爲さず、爲す可しを爲さねばならぬからである、惡の觀念とは、善をしていよいよ最善として發現せしむる善の內察作用に止まる可きもので、行爲として外的に發現す可き性質のものではないからである。

斯の如く生命の法則は、嚴として爲す可きは善であり、爲す可らざるは惡であることを知らねばならぬ。

善とは……爲す可し……と云ふ意味である、惡とは……爲す可らず……と云ふ意味である。

そこで爲す可らずが强烈になれば、爲す可しも從つて强烈となる、爲す可しが强烈になれば、從つて爲す可らずも强烈となる、そこに善人があるのだ、爲す可しを爲さなかつたり、爲す可らずを爲したりするのが惡人である。

何うして善と惡とが存在するか？　と云ふに、人間の自由なる生活は、その凡ゆる慾求を遂ぐるに、その道を誤らざるが善であり、その道を誤つたのが惡である、道も過ぐれば惡となり、及ばざるもまた惡である……自由のあるところに善惡がある、善惡のあるところに價値がある、人生とは、卽ち價値の生活であるからである。

この世に惡と云ふものが無くて、善ばかりであつたらさぞ有難い世界であらうのに、など考へるかも知れないが、善ばかりと云ふことは、善その者がなくなつて了ふことである。

美も、より以上の美に較べると醜であるやうに、善も、より以上の善に較べると惡である……人生が進化、向上、發展、創造である限り、善と惡とは交互相卽して、善は忽ち惡となり、惡は忽ち善となりて人格の錦繡を織るのである。

高い處に登るには必ず梯子段と欄杆がある、欄杆につかまりながら梯子段を登るのである、欄杆を惡と見れば梯子段は卽ち善である、そこで煙突や電柱に取附けた梯子段を見ると、欄杆と梯子の二つの働きをして居るのである、握るときは欄杆となり、踏むときは梯子となる、欄杆が梯子となり、梯

子が欄杆となつて段々上に登つて行くのだ。

昨日の善は今日の惡となり、今日の善は明日の惡となつて、いよ〳〵人格の向上を遂げ、人生の價値を發揮するのである。

譬へば上衣を乞はれた場合、直ぐと上衣をぬいで與へる、それは善である、乞はれたのは上衣だけであつたが、下衣まで與へた方がよろしかつた場合、向ふで言ふまゝに、上衣ばかりで止めたとする、これを下衣まで併せ與ふる事に較べると、上衣ばかり與へた行爲は劣つて居る、惡である。

この惡を感ずる觀念の鋭い人ほど、善はいよ〳〵發現するのである、日に〳〵新たに反省すると、昨日の善は今日の惡となり、今日の善は明日の惡とならざるを得ないのだ。

一として本來からの罪惡はないのであるが、慾求を追ふにその道を誤り、その度を誤るところから始めて罪惡が生じて來るのである、慾求を追ふにその道と、その度とを敎ゆるのが即ち善惡の觀念である。

善惡の觀念をして最も明確ならしめ、爲す可し、爲す可らずを誤らざるは神の自覺である……神は、善惡の絶對批判であるが、神の自覺は、絶對批判を實現せんとする最高善の創造主體である。

Y 問

近頃催眠術や、透視、念寫などいふ不思議なことが頻りに流行致しますが、果して何れだけの效果と價値とがあるものでございませうか、それについて豫言者の御批判を仰ぎ度いと存じます。

豫言者曰

催眠術や透視など頻りに流行して、世人も不思議に思ふて珍重して居るやうであるが、視力を以ての透覺こそ一寸珍らしくも思へやうけれど、耳の聽力は、透覺その者でないか、寺院の鐘にせよ十二時の午砲にせよ、凡ゆる障害物を透して聽ゆるものである、樂器の如きは、成るべく二重三重と複雜なほど美妙の諧調を發揮するものである。

鼻の嗅覺に於ても同じことだ、料理の獻立は、座敷に居ながら前知すること、臺所に行つて見るよりも反つて明瞭である、鼻を以て梅花を見出し、深山また幽蘭を探るに、兩眼を用ゆるよりも遙に便宜とするものである。

視覺も、聽覺も、嗅覺も同じものであるが、人間生活には、さしたる必要なきのみか反て有害無益であるから、透視されないやうに出來て居るのだ。

もしエツキス光線のやうに見えすゐたら、見えねばならぬ物體も見えなくなつて、ぶつかつたり躓

いたり、一日と雖も安全に生活する事が能きなくなる、殊に森羅萬象の美妙なる天地も、忽ち醜惡極まる怪物となつて了ふ、麗はしい人の顏も見えなくなつて、骸骨が蠢動するばかりになつて了ふ。

深遠なる天地は、ちやんと適度鹽梅を見計つて、それ〴〵ベストを盡したものである。

野蠻人の簡單なる生活は、五官の透覺に於て文明人よりも遙かに鋭敏である、世の開くるに從ひ、透覺の代用機關が整ふて來る反比例に、文明人の透覺はだん〴〵に鈍つて來る、五官以上の能力が文明を興すほどに發達して來ると透覺が減退するのは自然であつて、それが退化のやうで實は進化したものである。

進化とは鋭敏になるばかりが進化ではないのだ、それ以上の能力の發達の爲に、それ以下の能力が潰滅するを云ふのである。

野蠻人の五官よりも、下等動物は遙に〴〵鋭敏なものである、虎狼犬猫の如きは、夜なほ晝の如くに見え、鴉に至つては通則を轉倒して、夜は見えても晝は反つて見えないのだ、生活の必要から何うにでも出來あがつてゐる。

そこで餘りに透視を鋭敏にすると盲目と同じ結果になつて了ふ、何にも見えるものが無くなつて了ふからである、見えると云ふ事は、視力に適した障碍の意である、一切の障碍物を見透して了へば、何にも見えるものは無くなつて了ふ、エツキス光線も極度になれば何の役にも立たないのだ。

凡て生活が本位であるから、生活に最も適合するやうに、生活機能は自然に進化發達するものである、それで不思議なばかりが尊いものでも珍らしいものでもない、透視や、念寫などと珍らしさうに云ふけれど、眞に珍らしい不思議なものは、人々が日常用ひてゐる——頭腦と云ふ妙力である。

最底な記憶力にしても、若しそれを一々筆記することにしたならば、地球は忽ちノートブックを以て埋められて了ふのである、そればかりか記憶力がないとしたら、地球に滿載されたノートブックも何の役にも立たないのだ。

智力に至つては書籍を讀んでも、自然を見ても、無限の眞理を悉く腦中に收めて了ふ、「生物學者の頭には、地球上の動植物が悉く入つて居る、天文學者の頭には、あの無數の天體が悉く入つてもまだなか〴〵に餘地がある、哲學者の頭には、無限の宇宙が入りこんで、擴がつたり縮まつたり、浮いたり沈んだりして居るではないか。

若しそれ想像力、推理力、直覺力、その他の高等腦力に至つては、實に名狀すべからざる靈妙の力である。

肉眼を以て見ることの能きないものを、目に見るよりも確に取扱つて居るのが、人間日々の生活である、人情と云ひ、目的と云ひ、志を立てると云ひ、義務と云ひ、責任と云ひ、名譽と云ひ、體面と云ひ、身命を賭して爭ふ榮辱の感、大義名分、善惡邪正、皆悉く見る可らざるものにして、而も最も

明確の事實である。

この心的靈力をして、遺憾なく發現せしめんが爲に、目に見える物質は、僅かにそれが手傳を務むるに止まるものである、それでこの物質を透視したり、念寫したりする力は、動物的能力であつて尊いものでも珍らしいものでもないのだ、單に動物的能力の伏能如何を證するに過ぎないものだ。

勿論、目に見ゆる物質の中から、法則、原理の眞を見出し、或は美を見出し、或は善を見出すのは、自然の奥に潜む靈力を見出したものであつて、透視や念寫などとは譯が違ふのだ。

人間生活に必要となると、何うにでも生活機能が進化し、或は轉變することは自由である。

しかし透視や念寫などを不思議にして騒ぐのは、今に始つたことではなくて、昔から神通力と云つて、人間業以上に驚異してゐたものであつた。

その事柄は極めて幼稚なものではあるが、目前通常の事に滿足せず、人間を超越した世界に憧るゝ心の一端であつて、人類は果して、如何なる者を渇仰して止まざるかの傾向を見ることが出來るのである。

目前の人生を超出して、より以上の尊い美しい、より以上の深い高い、未だ曾て目に見ない人生……を見やうとする人間の慾求を極めて幼稚に示したものである。

通常目前の人生以上に、新たなる人生の開拓を願ふ心が、即ち藝術を興し、哲學を興し、宗教を興

したものである。

Y　問

豫言者は自らそれ程の立場に御出になると致しましても、私共まのあたり斯うしてお目にかゝつて居りますと何うもさういふ感じを起すことが出來ませんのは何故でございませう。

豫言者曰

時代を同じうして餘りに近づいて居ると、眞相が見えなくなるものだ、富士山に登つて居ても、眼前の石ころや蛇などが他の小山の狀態と同じだから、富士山の高きを忘れて了ふものだ。

あの太陽にしたところで、それが近く人間の側にあるとしたら、これを傷けやうとしたり、破壞しやうと試むる者が必ず出て來るものである。

S　問

注意といふ心のはたらきは、われ〳〵平素の生活では、忘りがちではありますまいか、古來の東洋の教學などでも、殊に西洋の實際生活では、隨分やかましく言つて居るやうに承つてゐます。これについて豫言者の御意見を拜聽することが出來ましたら、有難いと存じます。

豫言者曰

天秤の如き、度量衡の如き、時計の如き、あれは人間の注意を具體化したものである。

ハカリがなければ何もはかることが能きない、注意がなければ、何事も正確に取扱つたり整理したりすることが能きぬ、また注意がなければ何等の知識も得られないで、一切の努力も無效となる、のみならず取返しのつかない禍を招くことにもなる。

汽車の信號やポイントメンの如きは、最も顯著なる注意力の具體化である、それが粗忽であつたら、忽ち貴重の人命を失ふことになる。

あの內察と云ひ、反省と云ひ、修養と云ひ、信仰と云ふのも、最も親切に自ら自身に注意を拂ふ自己注意の生活である、念佛でも、題目でも、座禪でも、若しくは耶蘇教の祈禱でも、みな主觀的自己注意の生活に外ならぬ。

神の自覺とは、自己の魂に自ら注意した無上正眼の自己注意を云ふのである。

更に、罪の觀念も神の觀念も、いづれも共に、生命の生活に於ける自己注意の心的作用に外ならないのだ。

人間の最大不注意をあげて見ると……この美はしい天地に尊い生を享けながら、それを悟らないで居ることだ、無盡藏の寶庫は常に眼前に開放せられて居るが、人はこの寶を我物とすることが能きないのだ、尊い寶石や金剛石が、累々として無人の山野に落ちて居る、それを取りあげて見やうともしない、この無限の內容を有する神祕の宇宙も、恰も豚に眞珠の觀ではあるまいか。

無限の啓展を藏する靈魂も、そのままに放つて居るのである、立派な果と花を結ぶべき種子も、あはれ甕の中に仕舞込んで播くことを知らないのだ。

救濟とは、是等眠れる魂を醒さんが爲に、無上正眼の自己注意を促すことであらねばならぬ、豫言者の教壇は是が爲に興つたのだ、一言に約して言へば、我が教壇は宇宙的注意の具現である、宇宙大生命が注意を促し給ふ注意の突出である。

K 問

古への釋尊や基督には、こまごまと細則にわたりての教訓がありますが、豫言者にはそんな御教はございませんでせうか。

豫言者曰

豫言者にはそれはないのだ、それは豫言者には禁物である、豫言者の出現は、卽ち神生紀元の開闢であるからである。

神生紀元は、神々の自覺を以て、各々自ら靈性の啓展創造であるからである。

世界の凡ゆる既成宗教や、道德上に於ける教訓や工夫、凡ゆる道と云ふ道は多きに堪へないのだ、細則が瓦礫の如く道に塞つては、厄介、邪魔であらねばならぬ。

神々の生活は、何者をも生かす力である、棄てられた芥箱にも、忽ちにして寶玉を見出すことが能きるのだ。

神生紀元は、その生活が無限の創造であるから、細則は、絕對に無駄であることを知らねばならぬ。

神の生活にては、神の一字は細則でもあり、また綱領でもある。

神の一字は、千變萬化して無碍である、神の一字は、自由自在であらねばならぬ。

人々自らの衷に、細則を見出すでなければならない、人々自ら細則を造り出すことだ、古來のあらゆる教訓細目を咀嚼し取捨することは、各々思ひ〳〵に取扱ふ可きことである。

H 問

私共は今現に生きつゝあります、この限りない世界にわれ〳〵が生きてゐますことは、何たる不思議でございませう、しかしまたやがて死なねばなりませぬ、これもまた何たる神祕なことでございませう、死は悲しい！　生は苦しい！　死とは何でございませう？　生とは何でございませう？　こんなことをいろ〳〵深く考へて參りますと、私共は悶え〳〵て夜の目も眠りかねるのでございます。

かくの如きは、宗教心の兆しとも云ふべきでありませうか、宗教とは何ぞや？　と云ふ疑問に逢着するのであります。

世にはさま〴〵な宗教が澤山にありますが、これを總括した宗教その者の意義に就いて、御示しを願ひたう存じます。

豫言者日

大震災前には、淺草公園に凌雲閣と云ふ十二階の塔があつた、十二階の頂上に登ると、東京全市が一望に集まつて隅田川も、上野公園も、品川灣も悉く指呼の間に展開したものである。

宗教は、人生に於ける十二階のやうなものだ、第一階や第二階までは普通の家屋と同じであるが、三階、四階、五階と登つて行くと、そこに全く別天地が開けるのだ。

電車は何處から何う通つて居る、東京驛はあれだ、銀座はそこだ、筑波山はあちら、富士山はこちらと手に把るやうに分るのである。

十二階の頂上になると、風通しもよし空氣も奇麗だし、日光も隈なく遍照する……市民の生活狀態から東奔西走の活動ぶりまで、東京全市がちやんと掌の中に入つて了ふのである。

そのやうに、自分が住んで居る天地人生を胸の中に疊みこんで、悠々と立命して生活するのが宗教である、人生の意義……如何に生きねばならぬかを篤と承知をして、この大きな天地に生活するのが宗教である。

世には宗教とは、世間普通の生活とかけ離れた者のやうに考へたり、甚だしきは、宗教はいらないで濟せるやうな考を持つ人もあるやうだが、心得違ひである。

日本三景の一つに數へられた安藝の宮島を見たところで、鳥居や建築やを見たばかりで、これは駄

目だ、日光廟の方が遙に立派だ、三景などいゝ加減なものだと樓廊を廻つて引返すものが多い。

宮島の三景に數へられたのは、建築ばかりの爲ではない、島の絶頂彌山に登つて始めて三景たることが解るのだ、瀬戸内海の島々が盆景のやうに浮きあがつた青海原、眼界極めて濶大である……朝な夕な水煙縹渺の間、刹那〳〵に移りゆく景色のさまざま……

宮島は全身花崗岩である、彌山の途中に暮岩と云ふのがある、紫雲の如く見事な色を呈して居るのは、花崗岩に千歳の菌苔が蒸して居るからである、あの渓流の澄みきつて美しいのも、花崗砂の上を流れて居るからである。

一たび小舟を浮べて島を巡つたら、到る處それ〴〵趣きを競ふて居る、斯う見て來ると三景の一たるは爭へないものだ、何人も始終見て居る宮島ですら斯うだから、人生最高の意義を藏する宗教が、如何ばかり深遠であらうかは思ひ半ばに過ぐるものがあらう。

宗教は生活の根柢を突留めたものである、押へたものである。

宗教とは信仰の所依に生活することである、信仰と云ふことは、凡ゆる思想が統一されて自分のものになつた者を自分の實際生活に現はして行くことである。

だから哲學にせよ、藝術にせよ、科學にせよ、自分のものになつて、自分の生活の所依になるほどの信仰になつて居たら、それは宗教である、信仰の所依を宗教と云ふのである。

眞に自分の生活を支配するほどの信仰であつたら、それが、科學や、哲學や、藝術に限らない。
それで眞に生きやうと思ふならば、宗教的生活の外、生きやうはないのだ。
宗教的生活とは眞に生きることだ、その力ある信仰を得る爲には、科學からなりと、哲學からなりと、藝術からなりと、何からなりと、それはその人の適宜である。
宗教的生活とは、全我の生活を云ふのである、生活の統一である、全的に自己が生きることである。
科學や、哲學や、藝術や、道德や、是等は例へば、太陽光線を分析した七色である、宗教は太陽の本色卽ち白色である、無色である、白色は七色が統一された全的本色である、七色の一つ〳〵が如何に美しい色彩を放つて居ても、萬物を照らす日光は、太陽としての無色であらねばならぬ。
科學、哲學、藝術、道德、宗教などと、較べて來ると、宗教も七色の一つに見えて、哲學や藝術などと同樣に取扱はうとするのは、宗教の本質を知らないからである。
宗教とは、七色の一つではないのだ、太陽の本色である、白色である、日光である。
たとひ分析上の七色はなくとも、一日も缺く可らざるは白色の日光である。
白色の日光は萬物を照し、その光と熱とに浴するでなければ萬物は生育することが能きないのだ。
宗教もまた斯の如くである。
宗教的生活でなければ、人々の魂は生きることが能きないのだ。

故に宗教は、日光の普く萬物を照す如く、人々の心靈のために宣傳し傳道して倦むことを知らざるものである。
天地とは、日光と萬物との一體作用を云ふのである……人生とは、宗教と心靈との相卽生活を云ふのである、故に眞に生きるとは、宗教的生活を云ふのである。
人生卽宗教である、宗教卽人生である。
從來の旣成宗教は、人としての人生に對する教へであつたのだ。
今や、人としての人生を超啓して、神としての神生が開闢されたのである。
豫言者の出現は、卽ち神生紀元である、神生の開闢である……豫言者の出現卽神生紀元の開闢である。

E 問

人類の歷史を振返つて觀ますと、惡魔といふものが非常の役割をして居ります、別の言葉で云ひ替へれば罪惡の歷史ですが、豫言者は罪惡を如何に御覽なさるでせうか。

豫言者曰

人間は罪を犯して居るが、罪を犯しつゝも更に神を辿つてゐるのだ、皮相を見た君は罪の歴史といふが、實は神の歴史と云はねばならぬ、悪魔に踏みにじられながら、新たに〳〵神を辿つて來たものだ。

悪魔が無くて神を辿つても神の意義をなさない、悪魔と戦ひつゝ神を辿るところに人生があるのだ。

いよ〳〵大きな神を發見し、生きた神に近づきつゝあるのが人類全體の歴史である。

神は特に悪魔を送り、その悪魔の中から光を放ち給ふのである、恰度、神はユダを送つて基督の十字架を成就せしめ給ふたのと同様である。

基督は、神としての十字架に釘けられたのであるが、ユダは罪としての十字架に釘けられたものである、基督は神を發揮し、ユダは罪を發揮したものである、基督によりて爲す可しを示され、ユダによりて爲す可からずを示されたものである。

爲す可しと爲す可からずとは、積極と消極との同じ電氣の作用であらねばならぬ、いづれも人生を導く救ひの兩面であるのだ。

E 問

基督教では罪は神にあるではなく人にあつて、罪の起源は人間の墮落といふ事になつて居りますが、罪とは神に反對する精神及び行爲であつて、人が悪かつたと悔改めて謝まつてくれば宥さるるが、罪は何處までも罪であつて、神の反對であります。

それは神を求むる心、即ち高きを求むる心が神によつて與へられてゐるのですが、我々には、それと共に卑きを求むる心がありまず、神によつて高きものを示されて居りながら、卑きを撰ぶのは神がさせるのでなく、人といふ自分が撰ぶ自己撰擇であり、自分に與へられたる自由意志の濫用であります、但し悪かつたと悔改めれば宥されるのではありますが……

豫言者曰

神と罪と反對のやうに君は云ふけれど、實際には罪を犯す人に於けるその人の神は、その罪と同じ程度に居る神である、神は高いには相違ないが、その人の實際には高くはないのだ、罪を犯す程度に神も低いのである。

本當にその人の神が高かつたならば、低い罪を犯せるものではないのだ、罪を犯す限り、その人の神も低いのだ。

人間が仰ぎ見る神は高いに相違ないが、實際の神としては甚だ墮落をするのだ、それだから神に從

ふたり、神に反いたりするのだ、去就を二三にして顧みざる自分のやうな神であるからである。

君が信ずるクリストの神は、最も高い神であつたと同時にまた最もクリストの人格も高かつた、父と我とは一なりとクリストが云つたのはそれである。

普通の人々も、何人と雖も、神と我とは一なりであるが、その人が低ければその神も低くなるのだ、またその人が高ければその神も高くなるのだ……神が高くなるのではないのだ、その人が高くなつたのである。

眞劍に神の高きを仰ぎ、慕ひ、憬るゝならば、その人は必ず神の高きに近づくのであるが、神の高きを求めなければ、自分が低くなると共に神も低くなるのだ……神が低くなると、その神は惡魔となり、惡魔が高くなると、その惡魔は神となるのである。

一體君が云ふ犯した罪を悔改すれば、神は直にその罪を宥し給ふといふ事は、どう云ふことか考へて見ることだ……その罪を宥すと云ふ事は、罪と神とが反對と云ふ意味ではなくて、罪はその人がだん〳〵に、神の高きに近づく階段であることを知らねばならぬ。

自ら罪を感ずる罪の自覺は、それが神を明かに見た事實であつて、悔改立ちどころに至るのは、それが神に近づいた證據である、悔改すれば神は直にその罪を宥し給ふのは、罪と神とは反對ではなくて、その人の生活を上下する比準であることを知らねばならぬ。

E 問

御教の中に、罪は神の過不及であるとの御言葉がありますが、然うすると罪は神から出たものであり、罪の起源は神にあるのですか。

豫言者曰

基督教は勿論、從來の宗教はみな罪の起源など考へたものだ。

罪の起源を考へることは、神の起源を考へるのと同じことだ。

基督教に於ては、エデンの園にてアダムとイーヴが蛇に誘惑され、智慧の木の實を食つたといふことが、罪の起源といふことになつてゐるが、この物語をそのまゝ生かして考へて見ることだ。

神を知つたばかりで罪を知らないアダムは、神に對する信仰も死んで了つて、山野の動物と同じやうに、つまり人生と云ふ深遠なる生活を味ふことが出來ないので、神は特に蛇を投げ與へて、アダムに對してイーヴと云ふ女性を與へ給ふた如く、神に對した罪の自覺を與へ給ふたものである。

斯の如くアダムとイーヴが一體となりて、人類繁殖の紀元となり、罪の自覺は愈々神の無限を辿らしめて、深遠なる人生を現前せしめ給ふたものである。

罪を悔改むれば、神は宥し給ふとは何う云ふことであるか、つまり、罪は宥されるとは何う云ふこと

とであらうか。

是は基督教だけではない、あらゆる宗教に於て悉く罪は宥されるといふ事になつて居る、こは罪が神から出たものであり、また罪は神に歸ると云ふ……炳乎たる公開の保證であることを知らねばならぬ。

また如何に罪人でも死んで了へば神の子とされ、佛とされる、是も世界萬國同じである、これ一つでも、人間は本來神であること、罪は神から出たものであり、また罪は神に歸るといふこと……の一大事實を見るのである。

罪惡は、神から出て再び神に歸るのだ……罪惡とは生活の相である。

罪惡とは、神の過不及を云ふのである、過不及は卽ち生活の相である。

E　問

豫言者と、基督との關係は何んなことになりますか。

豫言者曰

豫言者は今日の基督であると云ふことになる、また今日の釋迦でもあるのだ。

基督の出現にしても、基督はモーゼの大きくなつたものである、大きくなつたモーゼが基督であるモーゼは基督の中に生きてゐるのだ。

そのやうに古への釋迦も、基督も、その他の凡ゆる聖哲も、現代のこの豫言者の衷にみな生きてゐるのだ。

E　問

基督は地上に天國を來らせんために來たのである……また神は愛なりと云つて居りますが、一口に豫言者の御教を云ひ表はして下さつたら、何ういふ事になりませうか。

豫言者曰

一口で云へば神生紀元の開闢である、『神々の生活』が創まると云ふ事である、この一語の中にあらゆる宗教の精髄が成就されたのである。

○ 問

神の域へ到るの道として、自然人生を宏く眺め渡し深く眺め入ると云ふのが、換言すれば靜觀の態度を持することが、一番早道と思ひます、それは現象の背後にあるものを直觀すると云ふことになる譯でありますが、先生は何う云ふ見方をなされますか。

豫言者曰

それは今まで何人もいろ〳〵な方法でやつてゐる事であつて、宗教とは、それを命がけに行つて居ることだ、自力とか他力とか、一神だの汎神だの、贖罪だの解脱だのと、死力を盡して何者かを造出したのが既成宗教であつた。

それでも、本當の事が得られないから豫言者の出現となつたのである、豫言者が出現した以上、豫言者を信ずる事が第一である、信ずるとは疑はないことだ、疑はない心は信の至れるものだ、信は愛の至れるものだ。

○ 問

豫言者を信ずるところに、安心はあるでせうが、神の自覺は同時にあり得るでせうか。

豫言者曰

そこに『覺信一如の妙諦』があるのだ、信仰卽自覺である、豫言者は神の自覺の具現であるからである。

○ 問

例へば眞宗に於て、彌陀を信ずれば安心はあるでせうが、佛としての自覺はないと思ひます。

豫言者曰

眞宗にては佛の自覺など、宗義として絶對の禁物である、また禪宗にては本來佛性ありと、佛の自覺を前提にしたものであるが、その自覺を得る爲に、座禪の工夫を積まねばならぬ事になつてゐる。

豫言者に於ては、豫言者その者が神の自覺その者である、その自覺を萬人の魂に投げ與ふ可き任命の光明である。

人々の魂は本來神であるから、その神を照らして自覺を啓發せしむる……自覺の具現である。

例へば人々の兩眼のために太陽が投げ與へられるのと同じ事で、太陽を仰いで始めて兩眼が明かである、太陽の下、直に兩眼が明かなる如く、豫言者を信ずる事が、それが直に神々の自覺となるのである。

○ 問

神そのものゝ內容は何でありますか。

豫言者曰

それは大切な問題である。

○ 問

神の域へ入つて、神であると自覺することは、單に自分が神であると思ふことゝは違ふと思ひます。

自分が神であると信ずることによつて、安心は得られるでありませうが、それのみで積極的內容がなければ、それを神と云ふも、人と呼ぶも、それは符號の相違に過ぎないではありますまいか。

豫言者曰

よく神と云はうと人と云はうと同じ事である、と云ふ風の理屈を云ふ人もあるが、ほんとうに神その者の內容を言葉で言ひ表はすと云ふ事は、神その者を無くして了ふことである……ただ人格的であると云ふより、他に言ひやうはないのだ、神といふ一語が神の凡てであらねばならぬ。

神！　唯然う唱へるだけでも大なる生命力である、例へば我と云ふても、その內容はと云へば、自ら我を解釋する事は出來ない、その解釋されない我ほど自分に取つて確なものはないのだ、神はその我の所依であるだけ、更に確なものである事を知らねばならぬ。

直感の妙趣は、知識を超越したる靈智の發揮である、我とか神とか云ふのは、知識の範圍ではなくて靈智の發揮である。

人々は皆自ら解釋することの能きない我を自覺して、日々生活を營んでゐるのである、解釋はし切れないが解釋以上の自明であるからである、神は更に、自明以上の神明であることを知らねばならぬ。

○ 問

先生は人の一生を宿命的に御覽なさる事はありませんでせうか。

豫言者曰

宿命といへば、抜きも差しもならぬ桎梏であるが、宿命ほど公平無私なものはないのだ、宿命は恰も天體の星座の列朝や運行の如しであるが、それが人生としての個人から見ると、喜びともなり、悲みともなり、樂みともなり、苦みともなり、宿命を呪ふにも至るのだ、斯の如きは、高貴なる自由の生活であるからのことで、人生が最も尊いからのことだ……自由の展開は、宿命をも超越することが能きるのだ、これを信仰と云ひ、自覺と云ひ、解脱と云ふのである……この宿命を超越したる無碍自由こそ、眞の宿命、卽ち無碍自由の境地を辿ることだ、この境地を辿る道が卽ち宗教である。

眞の宿命であらねばならぬ。

○ 問

永生の問題を如何に見る可きでありませうか、永遠は未來でなく、現在刹那が永遠だと私には思

はれますが。

豫言者曰

永遠には未來だとか、現在とか考へないことだ。

○ 問

生死一如といふ言葉がありますが、その言葉の内容は、この刹那の中に永遠を見ると云ふことよりも他にはありますまい。

豫言者曰

生死一如といふことはそんな抽象的なことではない、生死一如の事實は、今現に眼に見ることが出來るのだ。

君がこゝへ來て三時間になる、さうすると三時間はもうすでに死んでゐるが、それが生きてゐる事である、單に息をしてゐるといふ意味ばかりでなく、御話したり用を務めたりしてゐるではないか、

これが生死一如の事實である。

○ 問

それならば今現に生きつゝあることが、即ち刻一刻に死につゝある事になりますね。

豫言者曰

然うだ、生きつゝある事が死につゝあるばかりでない、赤坊が成長しつゝある事も實は死につゝある事である。

生きつゝあることが死につゝあるやうに、死につゝある事がまた生きつゝあるのである。

我と云ふ自我から見るので、生とか死とかあるが、神といふものから見れば死はなくて、生ばかりだ、自我はそのまゝ永遠の存在で、靈魂不滅的意味の自我であつて、何ともこの世のものを以て形容し難い存在である。

佛教でいふ、盆の水を海に覆せば元の水にかへるといふやうなものでない、基督教がいふやうな、死後天國に甦つて夫婦が出會ふといふやうなものでもない、またマーテルリンクや交靈術などの說く

やうな、個性のまゝの靈魂不滅でもないのだ。

止むを得ず是を譬ふれば、人の體は幾億萬の細胞から成り立つてゐるが、それがまた一つの我といふ體である、細胞から見ると無數であるが、我といふ體から見ると一つである。

そのやうに靈魂の不滅も靈魂から見ると無數の存在であるが、それが大生命から見るとたゞ一つの存在である、實に二而一如の妙境を盡されたもので、それがそのまゝ無限に啓展しつゝあるのである。

これは單に形容で、如實の靈界は形容し難いが、また我が心の如實の中に靈界の如實を見出すことである……我が心は現在ながらに、大生命と二而一如の生活である、この如實の消息を外にした靈界はあるべきものではないのだ。

靈魂は不滅である……神は永遠の生命である。

この二つを信ずるより以上の靈智はないのである、この二つ以上を知る必要がないからである、この最も簡單に思へる靈智は、靈智の一切を傾け盡くした靈智であることを知らねばならぬ。

S 問

私はどうも自分勝手で、何時も妄想邪念に煩はされて、勇ましく正しい道に進むことが出來ませ

豫言者日

自分の衷にある自分以上の自分をつかまへることが大切である、さうでないと自分で自分を仰ぐやうな氣高い者が何時までも出て來ないのだ。

それには、眞に生きる最も熱烈な慾求が必要である、普通の人も、その眞に生きる慾求を持たないではないが、マアその内にといふ風に押しやつてゐるのである。

何人にも往々神々しい氣分になり、人間を超越するほどの氣高い憧れがわいて來ることもある、それが大生命の閃きであつて、眞に生く可き唯一の力であるが……それと氣付かず、忽かせに取扱つて了ふことが世間一般の有樣である。

そのひらめきを尊崇して、深く辿つて行つた人が、孔子、釋迦、基督などである。

S 問

然らば、その眞に生きる熱烈なる慾求は、如何にして起ることが出來ますか。

豫言者日

『人間は大生命が自ら生活し給ふ生活本體として、創造し給ふたものである』

この絶對眞理は、古來からの凡ての敎へに於て明かにされて居なかつたものを、一つに取まとめ、更に宇宙の祕義を如實に宣明したものである。

一たびこの絶對なる眞理に觸れたならば、須らく豫言者出現の一大事因緣に歸命することだ。

たとへば釋迦の原始佛敎の如きは、全然無神論であつて徹頭徹尾、神と云ふ神を認めないものであつた。

生、老、病、死と云ひ、輪廻轉生と云ひ、無明煩惱と云ひ、それが人間にとつては慘禍を極めたる苦惱としたものであつた。

この大きな黑い手に掴まれたる宿命はどうすることも出來ない、たゞ一道の光明は我心にひそむ解脫の精進である。

この解脫の精進を辿りて、拔くべからざる宿命を突破して、自由自在の境地を開いたのが、釋迦の成道解脫であつた。

この小さな自分の心にひそむ一道の光明が、宇宙の宿命的桎梏を突破して自由自在の境地を得るといふのは、何事であらうか？　を考へて見ることだ。

心にひそむ一道の光明こそは、それが神であらねばならぬ、我が衷にひそむ神……釋迦はこの神を辿つたものであつた。

佛教の無神論といふのは、基督教が客觀に神を認むる客觀的神を認めないとのことで、主觀的有神論と云はねばならぬ、成道と云ひ、成佛と云ひ、本來佛性ありなどとは卽ちそれである。

主觀としても、客觀としても、いづれにか神はあらねばならぬ。

成道してから佛になるか？　成道以前から佛であるか？

成道して佛になつて見ると、本來佛性ありが愈々明かになつたものである。

本來佛性ありで成佛以前からの佛ではあるが、この佛を遺憾なく發揮したといふのが成道である。

神を主客兩觀に別けてみると、客觀の神は基督教にあり、主觀の神は佛教にありと云はねばならぬが、主觀と云ふも、客觀と云ふも、いづれも我が魂の觀ずる見方であつて、主觀にもあり、客觀にもあり、主客兩觀を超越したる存在が、卽ち神であらねばならぬ。

それで無神論の佛教も、後世には阿彌陀如來や、大日如來など客觀の神が勃興して、婆羅門の神々まで佛教の中に持ち込まれたものであつた。

絕對他力の阿彌陀如來のために、釋迦の佛性は消え失せて了つた、絕對他力の阿彌陀如來も、絕對自力の佛性も、いづれも一方に偏したものであつて、眞理は自他一力であらねばならぬ。

佛教を産出した婆羅門教は、毅然たる有神論であり、而も汎神的有神論であつた、猶太教や、基督教や、回々教は獨一的有神論であつた、世界宗教の大部分は、客觀的有神論に立脚したものであつた。

豫言者は、これらの凡ゆる宗教を綜合し統一するのみならず、宇宙の秘義を示現して、天地人生の歸趣を宣明したものである、……人生の歸趣を成就したものである、宇宙組織の目的を成就したものである。

S　問

そこを信じて押つめて行けば、熱烈なる慾求が起るのでありませうか。

豫言者曰

『人々は大生命（神）が自ら生活し給ふ生活本體である』と云ふ信仰が出來たならば、その人は既に信仰と共に熱烈なる慾求が燃えてゐる筈である、この慾求の燃ゆるところそこに自覺があるのだ、この自覺に徹するところそこに慾求はいよ〳〵燃ゆるのだ。

人々は、人間自らを超越した氣分を味ふことが大切である。

それを味はんがためには、神のひらめきを捉ふるでなければならぬ、否でも應でも飛びつくやうに捉ふることが大切である。

始めはイヤ〳〵であらうとも、それが不思議なことにはやつてゐる中に、春の日にフツクリ木が芽ぐみ、つぼみがふくらむやうに――歯を食ひしばつた氣分でなく、極めて自然に人間を超越する慾求が成長するものである。

これが小さな我と大きな我の戰ひで、始めは大きな我に從ふことは困難なやうに思へやうが、後には大きな我でなくてはやつて行けないことになるものである。

自分は人間であるからと云ふ風にやらないでゐると、何も出て來ない、たゞ崇高の境地を憧れることだ、人間を超越した神の閃きを捉へ辿つてやることである、それが爲には「我魂は大生命が自ら生活し給ふ生活本體である」と云ふ自覺に生きることだ……たゞもうそれが一切である。

S 問

豫言者の御教は、大變道德的の調子が高まつてゐるやうに考へられますが、釋尊の教は、生老病死の苦といふところから出發してゐると思ひます、罪惡は豫言者の御教で解決することが能きま

すが、この人生の苦といふものは、何ういふ風に解決が能きるのでせうか。

豫言者曰

釋迦の教は、生老病死から入つてゐるが、それを解脱するの道は如何といふことになれば、難行苦行したり身を苦しめて、生老病死以上の苦みをして修業したものである。

それを解脱した釋迦自らは八正道を立てゝ、それを實行してゐる、八正道と云ふのは、惡をさけ心を淨め、善に進む純倫理的のものである。

佛教でも善因善果、惡因惡果と言つて、煩惱の絆でも生老病死の苦があるのも、無明が本になつて居る、無明を絶つには智慧を研くことだ、智慧とは明德の意である、八正道は、卽ちこの明德を明かにする道である。

生老病死の苦といつても、何時も自分の生、老、病、死といふよりも、愛別離苦といふ風に、自分以外の骨肉友人などの老病死に出遇ふのが苦しいのである、そこで刹那の果敢ない人生を脱して、永遠の世界を求める、そこに解脱がある、佛教ではその境地を涅槃といふのである。

その涅槃を得るには成道するでなければならぬ、その成道の方法が卽ち八正道である。

S　問

豫言者の自己祈禱、自己禮拜と云ふ御教がまだよく呑み込めませぬが、呑み込めることができるには、何うしたらよろしいでせうか。

豫言者曰

自己の衷心にかうありたい、あゝありたい、こうしなければならぬ、あゝしなければならぬと云ふたゞならぬ願ひが出てくることがある、この事實は如何に取扱ふ可きであらうか？……これぞ大生命がわが魂を禮拜してゐ給ふからである。

最高善を實行せねばならぬといふのは、神が人々を禮拜し祈禱し給ふてゐるからである。

人々はこの崇嚴なる神祕をなほざりにして格別のことゝも思はず、マアその中にと、自己の衷心の慾求を押しやつてゐるのであるが、須らく肅然として敬虔に、この神祕の如實を體するでなければならぬ。

さうするとその慾求が單なる自分の慾求ではなくて、我が魂に閃き給ふ大生命の光りであることが、朧ろに分つて來るのである。

この體驗が積もると、神が禮拜し給ひ、祈禱し給ふてゐるといふ新福音が、呑み込めることになつて來るのだ。

これは古來の聖賢も氣がついたことで、孔子は天、德を予に就せりと云ひ、孟子は良知といひ、王陽明は良知良能と云ひ、ソクラテースは胸中神の聲ありと云ひ、カントは無上命法と云ふたが、これは皆心の衷に於ける神の閃きを認めたものであるが、それを豫言者は根本的に、大生命が自己の魂に現はれ、自己を禮拜し、祈禱し給ふとの宣明は、宇宙の秘義を如實に示現したものである。

この大生命の禮拜と祈禱を體して、人々もまた自己禮拜、自己祈禱を行ひ、いよ〳〵神を我が魂に成就することである。

斯て、神と我とは二つにして一つの生活となり、おのづから『神々の生活』を營むのである。

この大生命（神）と、自己との生活が全く一つになつて了ふところに、神々の成就がある、これを『二而一如の妙諦』と唱ふるのである。

S　問

これは私の感じですが、豫言者の御教は大變難かしいやうに思ひます、あれを古來の經典などと比較して、例へば親鸞の歎異抄には、斯うあるがそこは斯うであり、こゝは違つてゐるなど對照

して、說いて下されてあれば私共にはよく解ると思ひますが……

豫言者曰

兎に角何事も聞いてもらうことだ、一文不通の尼入道をも相手にするといふ歎異抄でも、善人なほもて往生す、況んや惡人をやとか、親鸞は父母の爲なりとて、一度も念佛唱へたること候はずとか、その當時には普通の考へでは解り兼ねることゝして、隨分難解とされたものであつた。

更に親鸞は晩年京都に歸つて來ても、弟子友人もなく、肉食妻帶の破誡僧とて、當時の社會には侮蔑と憎惡を以て迎へられ、批難攻擊の間に、身を終つたものであつた。

故に親鸞に關する記錄は皆無である、そこで親鸞は、實在の人物ではあるまいなどといふ說も出たのであつた。

かくの如く七百年後の今日では、最も平易とされてゐる淨土眞宗もその始めに溯れば、餘りに平易な爲に反つて難解とされたもので、それが年處を經るに從つて、だん〳〵目に慣れ耳に慣れ、始めて平易となつたものだ、今でも南無阿彌陀佛とは譯もなく稱へるが、南無とは何ぞや？　となると、僧侶すら解らないのが澤山にあるのだ。

特に豫言者の敎は、歷史的宗敎の敎ふるところとは全く違つた……神生紀元の開闢であるから、これまでの傳統的の考へに囚はれては、理解することが難かしくなるのだ。

S　問

親鸞の煩惱具足、罪惡深重の凡夫云々と云つてゐるのは、私はあれで宜しからうかと思ひますが如何でせうか。

豫言者曰

罪惡を痛感するのはよろしいが、たゞ神の閃き、彌陀の閃きがあるのに、それは自分でないと考へるのが間違ひだ、とかく一面に墮するからいけないのだ。

豫言者は一つも古人の敎をこはすのではない、たゞ一部分を言つてゐるから、それをまとめて統一するのだ、それで古來の敎は、まちがつてゐると云ふよりも、完備してゐないことである。

富士山を造つてゐる土石は、曾て平野の土石であつたが、噴火と同時に持ちあげられ、今は巔を頭に戴まで着流された外套となつて居る、富士の中心骨格は、云ふまでもなく噴火されたる巖角であらねばならぬ……豫言者の出現と共に、凡ゆる宗敎は新福音に吸收され、綜合統一されたものである。

それで、凡ゆる既成宗教は、みなこの豫言者の新福音の中に生きて居るのだ。

煩惱の凡夫であるから罪惡深重ではなくて、神であるから罪惡深重であらねばならぬ。

煩惱凡夫であるならば、當然罪惡深重の生活であらねばならぬ筈で、特に罪の救ひを求むる必要もないものだ、それが成佛を願ふて止まないのは、本來佛性であるからだ、煩惱も罪惡も、佛性あるからのことだ。

本當は佛性のひらめきを認めて、これを成就するための罪惡深重と云はねばならぬが、親鸞は煩惱の凡夫といふのみで、自分は全く無力で、彌陀の悲願にすがるより外往生成佛は能きないことになつてゐる、自己の裏にある佛性を棄てゝ了つてゐるのだ。

これを絶對他力と云ふてゐるが、彌陀を信ずる信仰こそは、それが自力であらねばならぬ、この自力を否定しては、信仰とはならないのだ、信が成立しないのだ、この絶對他力を信じ得る力は、即ち佛性の自力であらねばならぬ。

要するに絶對他力といふも、絶對自力といふも實は同じことだ、何となれば自力も他力も、佛性と佛性の交渉であるからである、他力か？　自力か？　眞理は自他一力であらねばならぬ、自他一力の極致は、神と我と一如的生活を營むことである、これを『二而一如の妙諦』と唱ふるのである。

佛教の煩惱罪惡に對する考へは、その根本に於て誤謬に陷つてゐたものである、それは人類の生れ

ながらに有してゐる食慾、性慾等に至るまでこれを煩惱罪惡視したものであるから、これを取除いたり、打勝たうとしたり、無駄な苦悶に心血を潤らしたものであつた。

然しこの誤謬は、獨り佛教ばかりではない、古來の諸宗教はみなこれであつた、かゝる有樣であるから親鸞の頭の中に、佛性といふものを認むる餘地が無かつたのも止むを得ないことだ。

S　問

罪の自覺なきものは如何に取扱ふべきでありますか。

豫言者曰

罪の自覺なきものは、神に對する信仰なきもので、極めて宗教的な能力の低いものであるから、それには傳道して神を自覺するやうに骨を折らねばならぬ、さうすれば罪の自覺は自らこれに伴ふものである。

一體人には遺傳、環境によつて何うしても惡人たらざるを得ないものがある。

それで善人が遺傳、環境によつて出來上つたものであるやうに、惡人も亦遺傳、環境によつて出來

上つたものであるから、その罪は結局、その個人が全部負はねばならぬと云ふ譯ではないのだ。
それは社會の罪天地の罪である、その罪は歸するところ大生命が負ひ給ふのである。
今までの宗教道德では、個人に負はせまた個人が負ふたものであるが、豫言者の新宗教では、それは大生命が負ひ給ふ事になるのである。
然し個人として罪の一切を負はふとする自責、自罰の衝動は、正しく神の本性を發揮したものである、故に大生命の負ひ給ふところは自分の負ふべきところであり、自分の負ふべきところは、大生命の負ひ給ふところである。
それ故にその罪惡の中からも、神の閃めきは始終絶えざるものである、それを捉へ辿つて人間を超越したる氣分を以つて生活することが、人生の歸趣であらねばならぬ。
遺傳環境によりて、善人ともなり善人ともなるとすれば、それは一種の宿命的約束であつて、つまり善人も惡人も無くなつて了ふのと同じことである。
人生の大部分は、この遺傳と環境に支配されて蠢動するのであつて、尊い自由意志も、多くは遺傳環境のまゝに働いてゐるのである。
人生の價値は、この宿命的遺傳環境の中から、自ら新たに生活を創造することである……その創造は如何にして創造されるであらうか?……

たゞ〳〵人間を超越した氣分を以つて、わが魂の衷に閃く神を辿ることである、この神の閃きを辿るところから、新たなる生活を創造することのみが、人生の意義の一切であることを知らねばならぬ。
古來の聖人哲人は、この種に屬したものである。
宇宙の祕義は、たゞ魂のうちに閃めく神その者を辿り捉へて、人生を超啓して行く神々の生活を營むことだ……この意味の事實が、古來から幾分でも實行されて來たもので、今まで多少とも人文の發達を見、また人格の向上を見ることが能きたものだ。

R 問

豫言者の新福音にては、神と人との關係を何う御取扱ひになりますか。

豫言者曰

『人々須らく神々の生活を營む可し』
玆に神生紀元は開かれたのだ、卽ち人々をして神々の自覺に位らしめ、須らく神々の生活を營むやう……宇宙的約束を宣明し實現するものである。

天地宇宙には大生命がある、これを神と云ふ、また既成宗教にては眞如、ブラーマ、佛、如來とも、天の御中主、大靈、太一、大極、天、ヱホバ、アラーなどとも稱へられてある。

この神を我以外に切離して信ずるのは、初心幼稚の信仰であつて之を相對門と名づける……神を我が裏に見、大生命と我と、二而一如を自覺するのが豫言者の新福音である、これを絶對門と名づける。

この大生命（神）は自然萬象の間にも顯現されてはゐるが、その眞生活に至りては、雷り人間を透してのみ發現し給ふのである。

豫言者曰く『大生命が自ら生活し給ふ生活本體として人間を創造し給ふたのである』

曰く『人間は卽ち大生命が自ら生活し給ふ生活本體である』

大生命（神）と人間とは、譬へば美妙なる腦髓の五官に於ける如しである、五官の奥は直に腦髓である、五官は實は腦髓の突出に外ならぬ、斯くて五官を待たざれば腦力の妙用も施せないやうに、大生命（神）も人間を外にしては生活し給ふ道がないのだ。

五官は腦髓の突出なるが如く、人間は卽ち大生命（神）の現出である、これを肉神と唱ふ、目に見える神、耳に聞える神々である、卽ち生き神、生き如來である、この肉神の妙諦に歸命して如實に生活するのが、卽ち神々の生活である。

R 問

善と惡との關係は、どう御取扱ひになりますか。

豫言者曰

人には善の觀念と惡の觀念がある。

惡の觀念があるから罪惡を犯すと云ふ譯のものではない、惡の觀念は强ければ强いほど、罪惡を犯さぬことになる、善人とは善の觀念の强いのみならず惡の觀念も强いのだ、惡人とは、善の觀念の弱いのみならず惡の觀念もまた弱いのだ。

つまり惡の觀念は、善の觀念に對して省察と、警戒の役目をする注意觀念に外ならぬ。

善の觀念と惡の觀念とは離る可らざる表裏一體の觀念である、この交互作用に依りて始めて反省し、內察し、解脫し、向上し、以て最高善を踐むに至るのである。

心は一つであるが、譬へば同じ電氣でありながら、積極と、消極との兩作用を現ずる如く、善の觀念は、積極電氣の作用……飽くまでも爲す可しを働き、惡の觀念は、消極電氣の作用……飽くまでも爲す可らずを働くのである。

罪惡の觀念は、卽ち最高善を實行せんとする消極的省察意識である、故に善の觀念と相卽不離の一

體作用を爲すもので、最高善を遺憾なく流露發現せしめんとする交互相對の妙用である。

豫言者は曰ふのだ。

曰く、罪惡を憂ふる勿れ、たゞ神たらざるを憂ふ可し。

曰く、罪惡を怖るる勿れ、たゞ神たらざるを怖る可し。

曰く、神を自覺せざるより大なる罪惡はあらざる可し。

曰く、神の自覺は、罪惡をして神と一體たらしむ可し。

神を自覺せざるが故に、罪惡のために罪惡を犯すに至るのだ、一たび神の自覺に位るや、忽ち『罪神一體』の妙境となるのである、神を自覺せざるほど大きな罪惡はないものだ。

天地宇宙の成立し存續しつゝある所以のもの、一に專ら人々をして神々の生活を營ましめんが爲に外ならぬ、この深遠崇絶なる歸趣あればこそ、幾億萬年來、天地は進化し、宇宙は啓展しつゝ、人類を旨と奉戴して生々育々し來つたものである。

されば人類は、天地宇宙の花であり果實である、花と咲いた人間が更に神々の果實を結ぶに至るのが、天地の成立宇宙存續の意義である、根本目的である。

されば、この最も莊嚴なる世界は、まさに、生き神の住ふ可き世界として要意されたのであつたのだ。

この豫言者は、取も直さず天地宇宙の歸趣、目的を成就せんが爲に出現したのである。

R、問

豫言者の新福音と、既成宗教との關係は何うなるのでありませうか。

豫言者曰

是までに基督教、佛教、回々教、儒教、神道、猶太教と、各々その宗祖を異にし教義を別にし、歸するところを知らざる凡ゆる宗教は、なほ溪流の河川となり、河川の遂に海洋に注ぐ如く、悉くこの豫言者に宗朝歸一すべく約束せられてあつた、特に釋迦及び基督は、この豫言者出現に於ける先驅案内であつたのである。

この豫言者が出現した以上、一人や二人の神の子や佛陀が居たといふ貧弱極まる世界と人生を容さない、何人も悉く神々の自覺に位り、萬人悉く神々の生活を創めねばならないのだ。

收拾す可らざる凡ゆる宗教の經典も、この豫言者が出現した以上、眞理は忽ち篩にかゝつた、極め**て直截となり簡明となつたのだ。**

曰く『人々須らく神々の生活を營む可し』

これである、端的に神や如來の生活を營むのが一切である、八萬四千の法門も新舊約のバイブルも、その他凡ゆる經典教義も、擧げてこの一句に綜括するのである、一以つてこれを貫くのだ。

R 問

何うして神々の自覺を得ることが出來ませうか。

何かこれを得る工夫がありませうか。

豫言者曰

人々須らく肉神の妙諦に歸命し、神々の自覺に位るのが第一義であらねばならぬ、斯て崇嚴の氣分（神々しい氣分）を以つて、念々神々の自覺に燃ゆることである、この工夫を常熱念覺と唱ふるのだ。

崇嚴の氣分とは、我が魂に閃く大生命の光である。

曰く、大生命（神）はこの豫言者を待つてのみ、始めて聖旨の啓展を遂げ給ふことが能きるのだ。

曰く、この豫言者は、即ち大生命（神）の聖旨の具現である。

されば、この豫言者を信ずることが、それが直に神の自覺を得ることである、これを『覺信一如の妙諦』と唱ふるのである、何よりも先づ豫言者を信ずることだ、信ずるとは疑はないことだ、疑はない心は即ち同化の信である。

聖旨の具現たる豫言者のと同化であるが故に、その人は直に『神の自覺』の所有者である。

神生紀元は、この『覺信一如』の妙諦を以つて開闢を遂げるものである。

斯る神生紀元となりては、基督どころか、釋迦どころか、萬民悉く生き神、生き如來であらねばならぬ……大生命が自ら生き給ふ生活本體としての自覺の生活が、即ち『神々の生活』である、肉神の妙諦とはそれである。

* * * * * *

この豫言者を信ずる傳道者に……豫言者は謂ふのだ。

この豫言者を信ずる信仰の功德は、釋迦、基督の濟度も比較を容れない、古今を絶した偉烈である、そは神の自覺を叫ぶ神生紀元の傳道者であるからである。

この豫言者は、人生を閉ぢて神生を開き、神生紀元の開闢者としての絶對豫言者であるからである。

我が見さる後世の傳道者よ、須らく先づ、大生命と豫言者と自己との三位一體を味透することである。

我が見さる後世の傳道者よ、須らく先づ大生命と豫言者と自己との三位一體を味透することである、味透とは、直に傳道を始めねばならぬ立命の自覚を云ふのである。

宇宙生活の秘義を披瀝されたる神人相即の如實は、豫言者出現の因緣となり、出現の因緣は神生開闢の紀元となつたのである。

大生命の生活……一位、豫言者の出現……一位、神生の開闢……一位、三位一體とはそれである。

神を成就するもの

（定價金貳圓）

昭和四年二月廿五日　印刷

昭和四年三月三日　發行

著者　宮崎虎之助

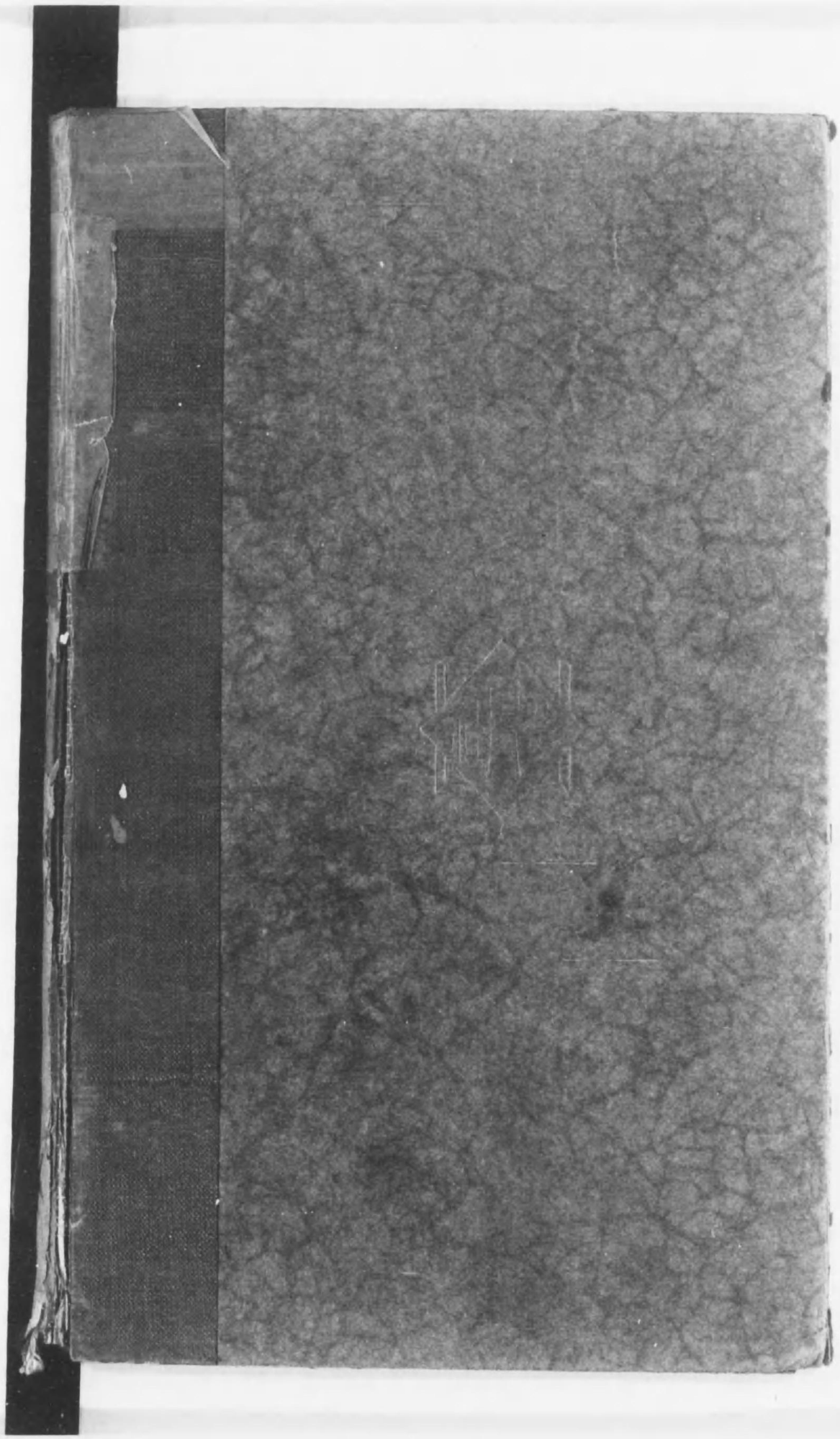
發行者　下中彌三郎　東京市麹町區下六番町一〇

印刷者　濤川薫　東京市麹町區下六番町一〇

發行所　東京市麹町區下六番町一〇　株式會社　平凡社

振替東京二九六三九番　電話九段三三一六六四番　六四七五番

（特田印刷所印行）　（金昇堂製本）

332
450

終